

佐久市埋蔵文化財報告書 第193集

埋蔵文化財発掘調査報告書

—長野県佐久市長土呂の古代集落調査—

周防畑遺跡群 南下北原遺跡

2011.3

丸五不動産株式会社
佐久市教育委員会

佐久市埋蔵文化財報告書 第193集

埋蔵文化財発掘調査報告書

—長野県佐久市長土呂の古代集落調査—

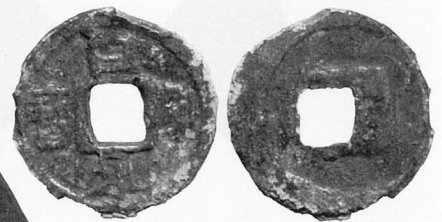
周防畑遺跡群 **南下北原遺跡**

2011.3

丸五不動産株式会社
佐久市教育委員会



H7-20 「刑部仁丸」
墨書土器碗（高台欠損、80%縮小）



検出-5 「貞観永寶 (870年)」
(150%拡大)

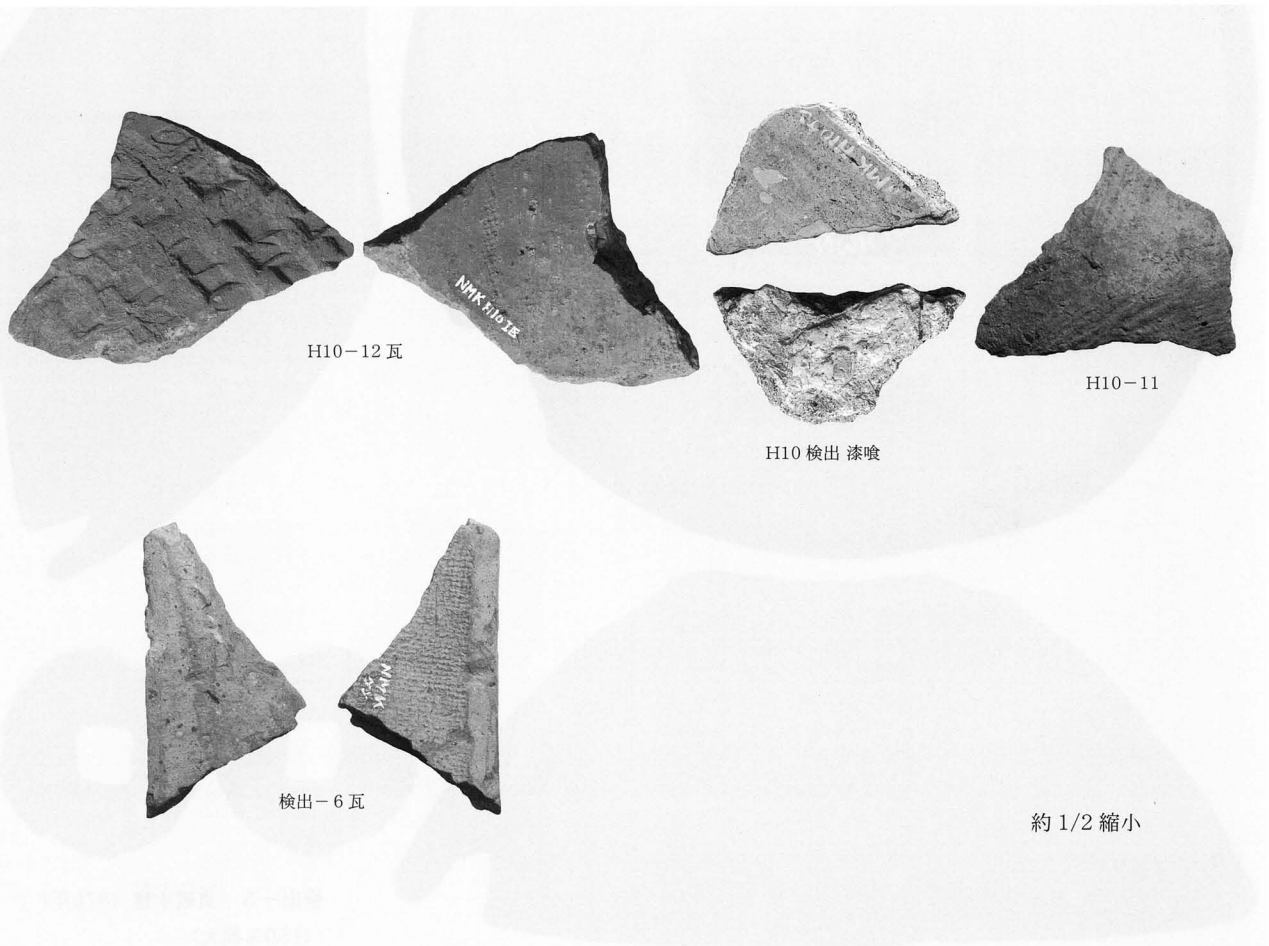
南下北原遺跡 報告書の概要

- 8世紀中頃（奈良時代後半）住居址 3棟（H8・H10・H11）
- 8世紀末～9世紀初頭頃（平安時代初頭）住居址 1棟（H2）
- 9世紀前半頃住居址 2棟（H4・H9）
- 9世紀後半頃住居址 3棟（H1・H7・H12）
- 10世紀後半～11世紀前半の住居址 2棟（H3・H6）

奈良の中頃から平安の中頃までの集落であろうことが判明した。部分的であるため密度については測り知れない。今後の調査が期待される。

H7号住居址から正位に「仁丸、十」1カ所、「刑部仁丸」2カ所が逆位に書いてある墨書土器椀が出土した。また皇朝十二銭の「貞観永寶」が検出面から出土している。

佐久郡の妙楽寺が定額寺（官寺）に任ぜられたのは貞観8年（866）である。墨書土器の椀年代が9世紀後半とみられ、検出面ではあるが皇朝十二銭の「貞観永寶」（870）が出土している。H10からは布目の平瓦、検出では布目の丸瓦があり、この地あたりは佐久郡衙関連、ことに隣接地から古代瓦が出土する事から定額寺関連の推定地のひとつとなっている。本調査で人名の墨書土器、布目瓦・皇朝十二銭の出土により、定額寺の有力候補地といえるであろう。

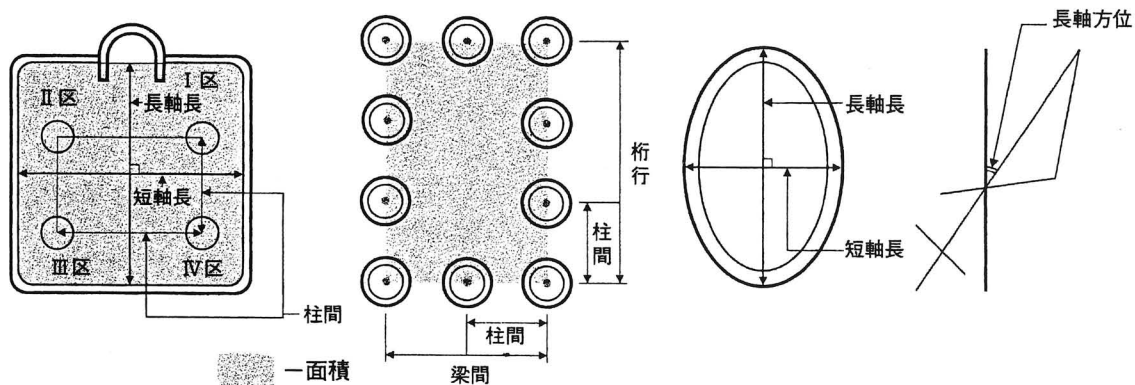


例 言

1. 本書は佐久市長土呂の丸五不動産株式会社の宅地造成事業に伴う発掘調査報告書である。
2. 調査原因者 丸五不動産株式会社
3. 調査主体者 佐久市教育委員会文化財課
4. 遺跡名および所在地
周防畑遺跡群 南下北原遺跡 (NMK) 佐久市長土呂字南下北原 9 9 6 - 1 他
5. 調査面積 1, 2 9 6 m²
6. 発掘調査担当は出澤 力、報告書執筆は森泉かよ子が行った。
7. 本書及び本遺跡の出土遺物の資料は佐久市教育委員会の責任下に保管されている。

凡 例

1. 遺構の略号は以下の通りである。
 竪穴住居址—H 竪穴状遺構—Ta 土坑—D ピット—P 溝址—M
 遺構—1/80 遺物—1/4 但し、鉄製品・骨—1/2
2. 挿図の縮尺は原則として以下の通りである。
 遺構—1/80 遺物—1/4 但し、鉄製品・骨—1/2
3. 遺構の海拔標高は各遺構ごとに統一し、水糸標高を「標高」とした。
4. 土層の色調は2005年版『新版 標準土色帖』に基づいて示した。
5. 写真図版中の遺物番号と挿図の遺物番号は同一である。図版中の縮尺はほぼ挿図と同じである。
6. 遺構の計測は下図に示した測定値である。
 竪穴住居の面積は床面積で、長軸長×短軸長である。
 壁残高は最大長である。
 長軸長と短軸長の差が1割を越えたものを長方形とした。



住居址

掘立柱建物址

土 坑

長軸方位

7. 遺物一覧表の () は推定値、〈 〉 残存値、- は測定不可能であることを示す。
9. 本報告書挿図中のスクリーンパターンは以下のことを示す。

遺 構



地山断面



焼 土



粘 土



柱 痕

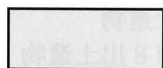


堀 方



炭化物

遺 物



黒色処理



釉



須恵器断面



礫

目 次

巻頭図版

報告書の概要

例言・凡例

目次

第I章 発掘調査の概要	1
第1節 調査の経緯と経過	1
第2節 調査組織	2
第3節 調査日誌	2
第II章 遺跡の立地と環境	3
第1節 自然環境	3
第2節 歴史的環境	4
第3節 基本層序	4
第III章 遺構と遺物	7
第1節 竪穴住居址	7
第2節 竪穴状遺構	20
第3節 土坑	20
第4節 溝址	21
第5節 単独ピット	21
第6節 検出遺物	21
第IV章 まとめ	22
遺構一覧表	23
遺物一覧表	24
写真図版	29
報告書抄録	
挿図目次	
第1図 遺跡の位置および周辺遺跡図 (1:20,000)	1
第2図 南下北原遺跡遺構配置図 (1:2,000)	3
第3図 南下北原遺跡全体図 (1:500)	5
第4図 H1号住居址	7
第5図 H2号住居址	8
第6図 H3号住居址	9
第7図 H4号住居址	9
第8図 H5号住居址	10
第9図 H6号住居址	11
第10図 H7号住居址(1)	13
第11図 H7号住居址(2)	14
第12図 H8号住居址(1)	15
第13図 H8号住居址(2)	16
第14図 H9号住居址	17
第15図 H10号住居址	18
第16図 H11号住居址	19

第17図 H12号住居址	19
第18図 竪穴状遺構	20
第19図 土坑	20
第20図 溝址	21
第21図 検出遺物	22

付表目次

第1表 南下北原遺跡遺構一覧表
第2表 H1号住居址出土遺物一覧表
第3表 H2号住居址出土遺物一覧表
第4表 H3号住居址出土遺物一覧表
第5表 H4号住居址出土遺物一覧表
第6表 H5号住居址出土遺物一覧表
第7表 H6号住居址出土遺物一覧表
第8表 H7号住居址出土遺物一覧表
第9表 H8号住居址出土遺物一覧表
第10表 H9号住居址出土遺物一覧表
第11表 H10号住居址出土遺物一覧表
第12表 H11号住居址出土遺物一覧表
第13表 土坑出土遺物一覧表
第14表 M1号溝址出土遺物一覧表
第15表 M2号溝址出土遺物一覧表
第16表 検出出土遺物一覧表

図版目次

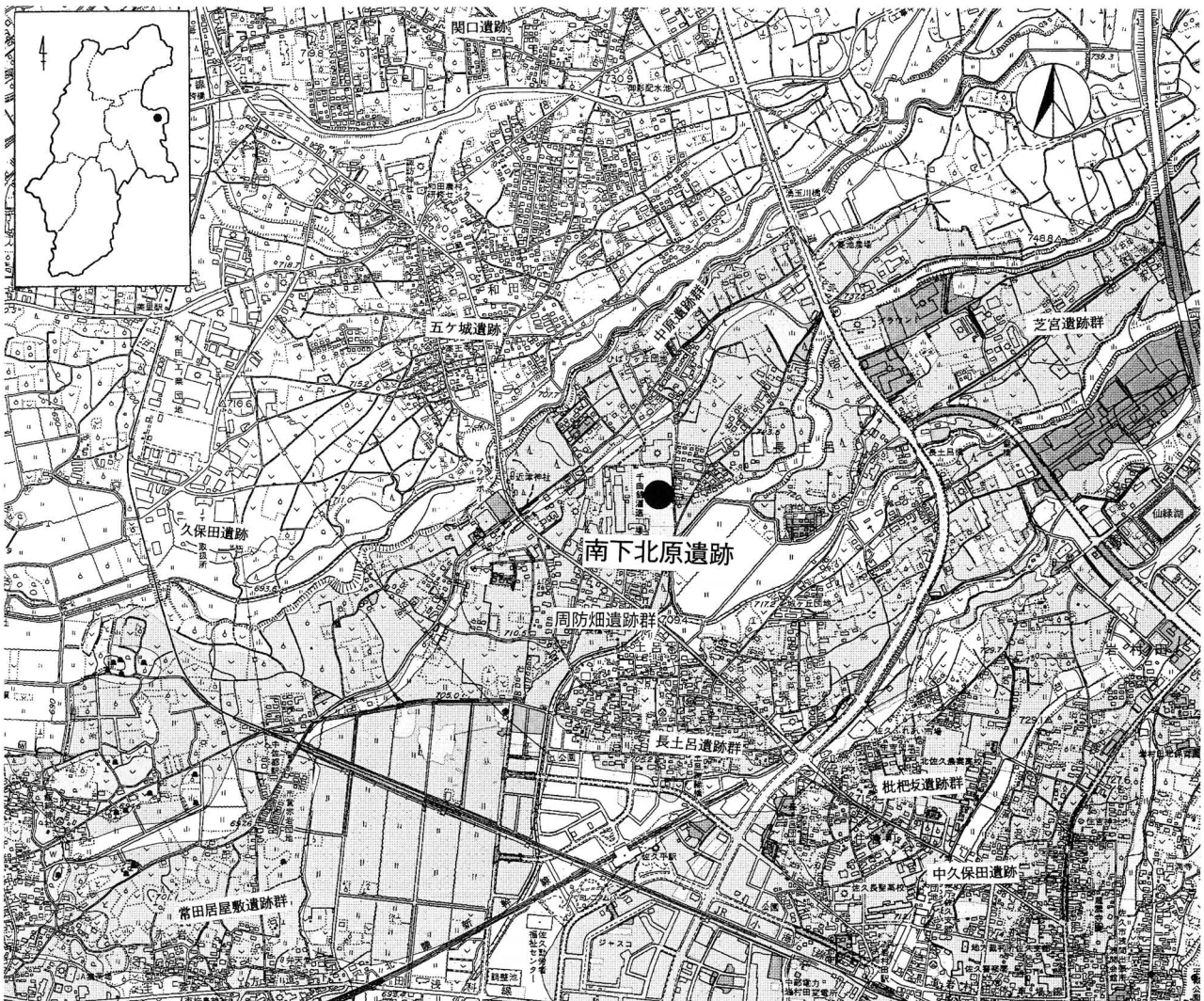
巻頭図版一 「刑部仁丸」墨書土器・貞観永寶
巻頭図版二 瓦他
図版一 H1～H3住居址
図版二 H3～H6住居址
図版三 H6～H7住居址
図版四 H7～H9住居址
図版五 H10～H11住居址
図版六 H12・竪穴状遺構・D1・M1
図版七 M2・M3・A～C地点全景
図版八 H1～H6出土遺物
図版九 H7出土遺物
図版十 H7・H8出土遺物
図版十一 H8～H11・D・M・検出出土遺物

第 I 章 発掘調査の概要

第 1 節 調査の経緯と経過

対象地は、周防畑遺跡群の所在する台地であって、田切り地形の帯状台地上にある。東側では田切りの帯状低地に面し、台地は北から南に傾斜している。北側は削平、南は盛り土をして、グランドとして利用されていた。隣接する南の工場造成時の排土から古代寺院に関連すると推測される「川原寺式」の古代瓦が出土しているところである。今回、丸五不動産株式会社により宅地造成事業が計画され、平成 20 年度の試掘調査で、遺構遺物が検出されている。本調査は道路部分について、発掘調査が行なわれた。

遺 跡 名	南下北原（みなみしもきたはら）遺跡	略号	NMK
所 在 地	佐久市長土呂字南下北原 9 9 6 - 1 他		
調 査 委 託 者	丸五不動産株式会社		
開 発 事 業 名	宅地造成事業		
発掘調査期間	平成 21 年 8 月 6 日～8 月 26 日		
調 査 面 積	1, 296 m ²		
調 査 担 当 者	出 澤 力		



第 1 図 遺跡の位置および周辺遺跡図 (1 : 20,000)

第2節 調査組織

平成21年度（2009）、平成22年度（2010）

教 育 長 木内 清（平成21年6月退職）土屋盛夫（平成21年7月～）
社会教育部長 内藤孝徳（平成21年4月～6月）工藤秀康（平成21年7月～）
社会教育部次長 金澤英人（平成21年4月～6月）
文化財課長 森角吉晴
文化財調査係長 三石宗一
文化財調査係 林 幸彦 並木節子 須藤隆司 小林眞寿 羽毛田卓也 富沢一明
上原 学 出澤 力 神津 格（平成21年10月）井出泰章（平成21年11月～）
調査担当者 佐々木宗昭 森泉かよ子
調査副担当者 堺 益子 武者幸彦
調 査 員

甘利隆雄 安藤孝司 飯森成英 岡村千代美 小井戸秀元 加藤 信一 風間 敏
川瀬祥太 小島 真 小林百合子 小山 功 坂井一夫 菊池喜重 滝沢三男
土屋武士 中島フクジ 日向昭次 細萱ミスズ 百瀬秋男 山田英輝 依田三男
横尾敏雄 油井満芳 渡辺久美子 渡辺 学

図面修正・遺物実測・トレース・編集

岡村千代美 狩野小百合 上山貴恵 加藤ひろ美 小林百合子 清水律子 堺 益子
田中久子 広瀬利恵子 細萱ミスズ 小幡弘子 細谷秀子 依田好行 柳沢亜矢子
柳沢孝子

第3節 調査日誌

平成21年度

- 8月6日 重機を入れ、調査部分の耕土除去作業を行う。
調査区に基準点基準線を設定する。
本日より調査員を入れ、発掘調査を開始する。
A地点より遺構検出作業。H1を検出。
17日 B地点検出作業。H5の調査をする。
18日 E地点検出。H7の調査をする。H7より「刑部仁丸」墨書土器出土。
19日 C地点、H9調査。
21日 D地点、H10調査。
26日 現場作業終了。
室内にて土器洗浄、注記作業を行う。

平成22年度

- 5月21日 室内にて整理作業を再開。土器接合、
石膏復元、図面修正を行う。
遺物実測、遺構図・遺物のトレース、
版下作成、遺物写真撮影、
報告書割付、一覧表作成、原稿執筆
と報告書作成作業を行う。
3月 報告書刊行。



遺構検出風景

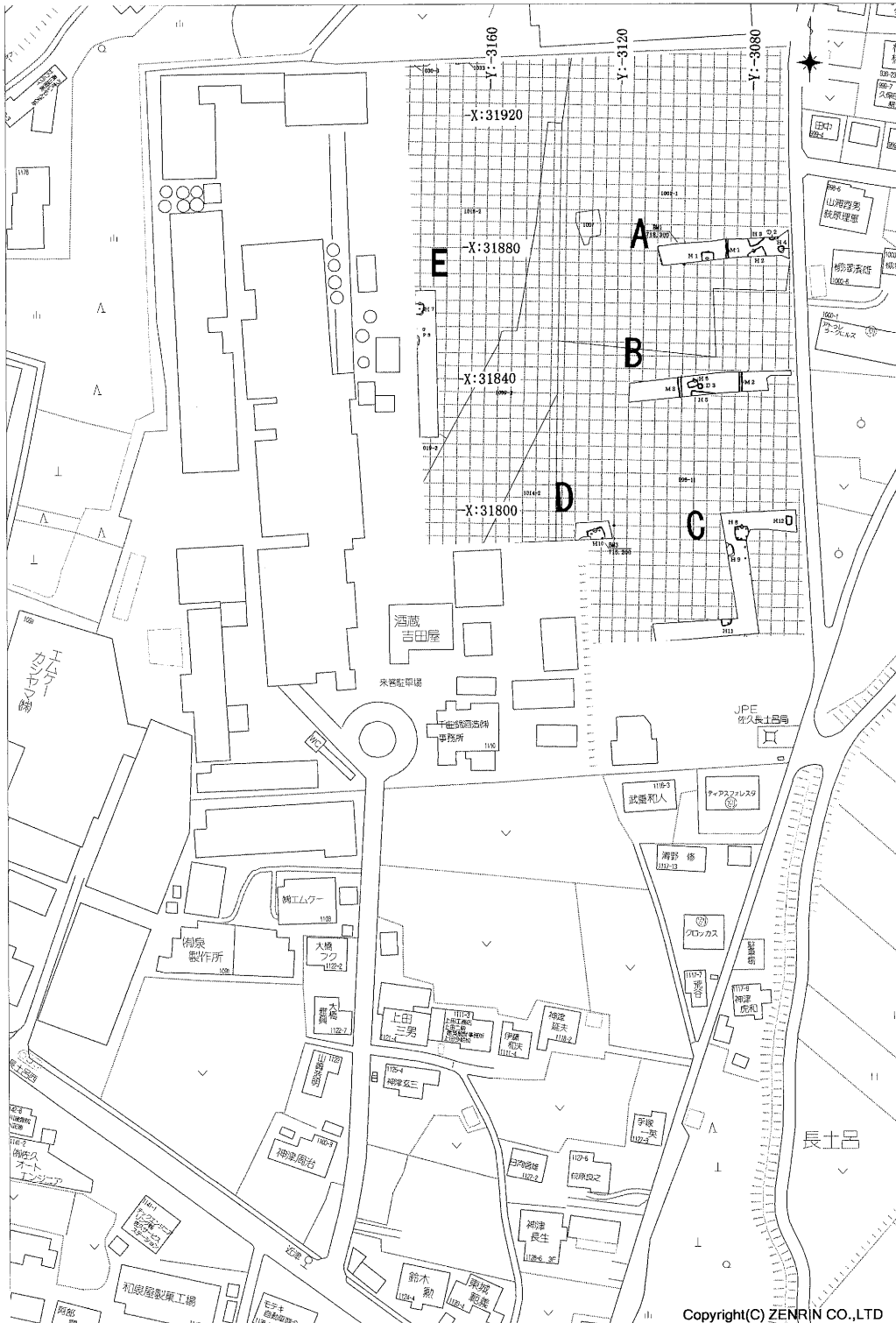
第Ⅱ章 遺跡の環境

第1節 自然環境

本調査地点は佐久市の北部、浅間山麓の岩村田台地に位置し、標高717m前後を測る。この付近の

地層はすべて浅間火山の噴出物によって構成され、基盤の最下底部が第一次黒斑火山の大熱泥流(塚原泥流)の黒色集塊岩である。その上部に、黒斑火山の発達過程に噴出した多量の火山灰・火山弾などの湖成堆積物(水平互層を繰返す湯川層)が重なっている。その上部に浅間火山噴出物である浅間第一軽石流(P1)が厚く堆積しているところである。

北側は浅間山から南西にかけて細長い台地となっている。浸食されやすい第一軽石流の火山灰が流されて「田切り地形」となっている。本調査遺跡も第一軽石流が浸食されて作り出した「田切り地形」の台地上にある。



第2図 南下北原遺跡遺構配置図 (1:2,000)

第2節 歴史的環境

本調査地点では、縄文時代の土器片があるが、住居址は認められない。弥生時代の遺構遺物はなく、弥生後期の集落と墓域が1kmほど南の台地先端部に展開している。周防畑遺跡B、宮の前遺跡、西近津遺跡群がある。ことに高速道路下の西近津遺跡群では国内最大級となる18×9.5mの長方形の竪穴住居址が検出され、床面積は46坪におよぶという。これほどの大型住居を建築できる勢力をもつ集団が佐久に形成されるに至ったのである。

古墳時代の初頭は、本遺跡の南、新幹線佐久平駅付近の周防畑遺跡群辻の前遺跡にある。箱清水土器の特徴を備えた胴球胴形の土器がみられ、S字口縁の台付甕を伴うことから古墳時代前期へと移ってゆく。隣接の下伯母塚遺跡のH8からは銅鏃が球胴形の弥生後期末の土器群ともに出土している。

古墳後期～奈良時代の遺跡は現在流通団地となっている聖原遺跡があり、馬具、八稜鏡、金銅製鈴、石製印「伯万私印」、緑釉陶器、皇朝十二銭などが出土している。

本調査地点南の工場建設の際に「川原寺式」とみられる古代瓦も出土している。これらから、古東山道、令制東山道、定額寺、牧、駅など官衙的性格の強い遺跡が考えられている地点である。

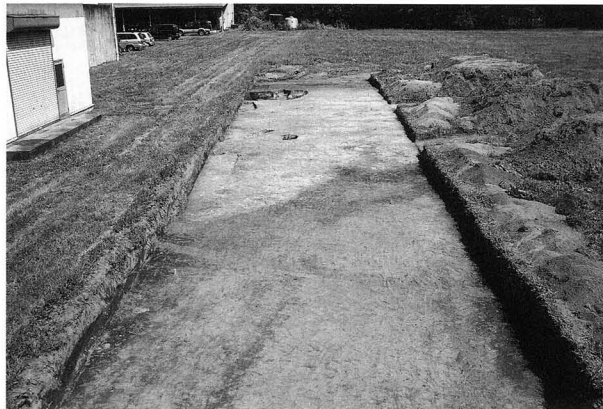
中世は岩村田市街の東に大井城跡があり、中世佐久の北の領主であった大井氏の居城とされている。南の黒岩城跡が発掘調査され、54棟の竪穴状遺構・掘立・土坑などからは15・16世紀の遺物を出土している。大井城跡の400mほど南の下信濃石遺跡では、大井氏の氏寺である龍雲寺の一部が調査されている。「大井」の墨書・刻書がここ長土呂地籍から多く出土し、大井の発祥の地とされている。

第3節 基本層序

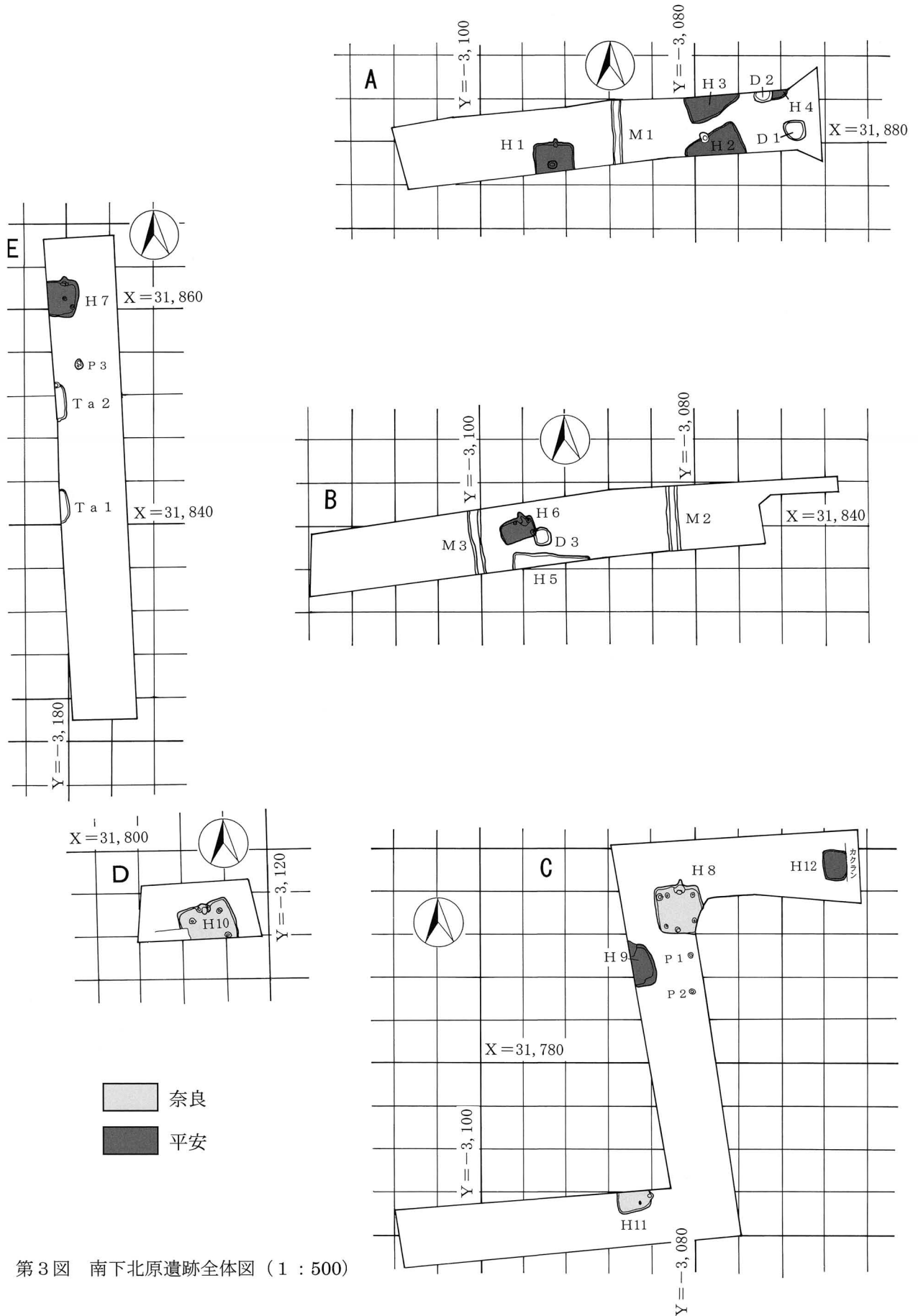
この付近の地層はすべて浅間火山の噴出物によって構成され、基盤の最下底部が、第一次黒斑火山大爆発の山体破壊の大熱泥流（塚原泥流）である。湯川沿岸に点々と堆積し、黒色集塊岩の頂上部が姿を残している（3万年前ほど前）。その上部に黒斑火山の発達過程に噴出した多量な火山灰砂礫火山弾などの湖成堆積物の湯川層が重なっている。

塚原泥流発生後、仏岩火山活動があつて、しばらく火山活動の休止期があり、その後2回の軽石流の噴出があつた。最初の噴出物を第一軽石流（1万3千年前）、後から噴出したものを第二軽石流という。浅間山南麓に、広く展開した軽石流は、塚原泥流の地域に達すると、西と南に分かれ、南にむかった軽石流は湯川の谷を埋めた。（1988.『佐久市志 自然編』P83、1986白倉盛男『大井城跡』）

本遺跡は浅間第一軽石流に構築している。



E地点（南より）



第3図 南下北原遺跡全体図 (1 : 500)

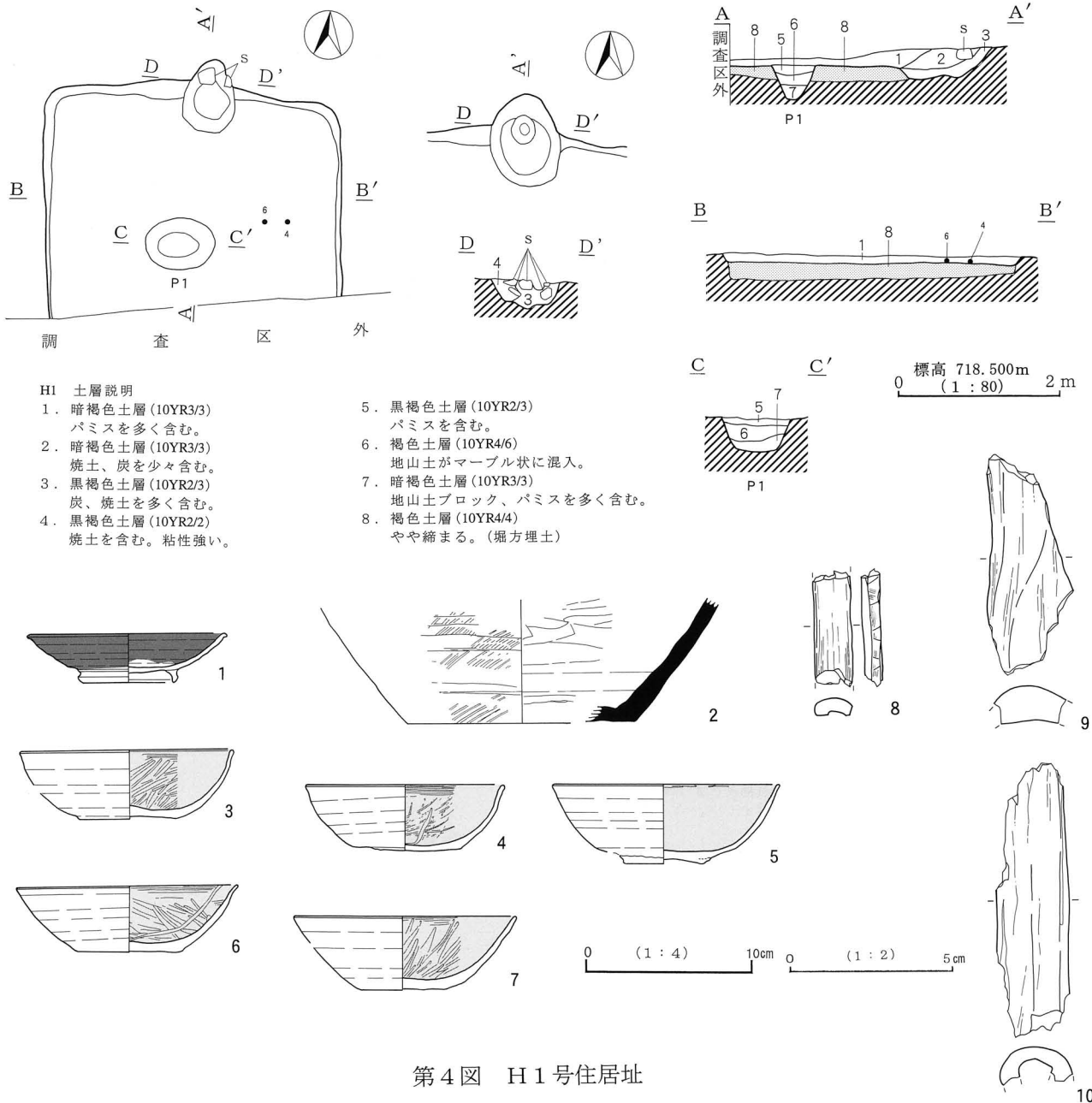
第三章 遺構と遺物

第1節 竪穴住居址

1) H1号住居址

Aトレンチで検出され、南壁は調査区域外である。南北〈2.56〉m、東西3.52mの方形基調の住居址である。壁は6~23cmを測る。カマドは北壁にあり火床と煙道の礫がのこる。カマド方位はN-3°-Wを指す。支柱穴は検出されていない。床面中央に床下土坑とみられる楕円形で84×63cm、深さ42cmのピットがある。

出土遺物は灰釉陶器・須恵器・土師器、骨が出土している。灰釉陶器は皿で釉薬が漬け掛けされる。高台は貼付され、三日月型を呈す。須恵器は四耳壺の底部であろうか外面に叩き目を残し、横ナデさ



第4図 H1号住居址

れる。実測できないが須恵器杯の口縁部片が1点ある。土師器甕はロクロ甕があり、外面下部がヘラ削りされている。小型のロクロ甕片もある。実測資料には土師器杯がある。いずれも黒色処理され、7の杯のみがミガキが丁寧になされている。4・6は雑なミガキの後、十字に暗文が施される。7の杯は底部周辺、底部がヘラ削りされている。3の杯の底部は薄いが他は厚い。5の器肉は薄く、底径が4.5cmと小さく（他は6cm前後）、底部のみが貼り付けられる「底部柱状づくり」のものであろう。

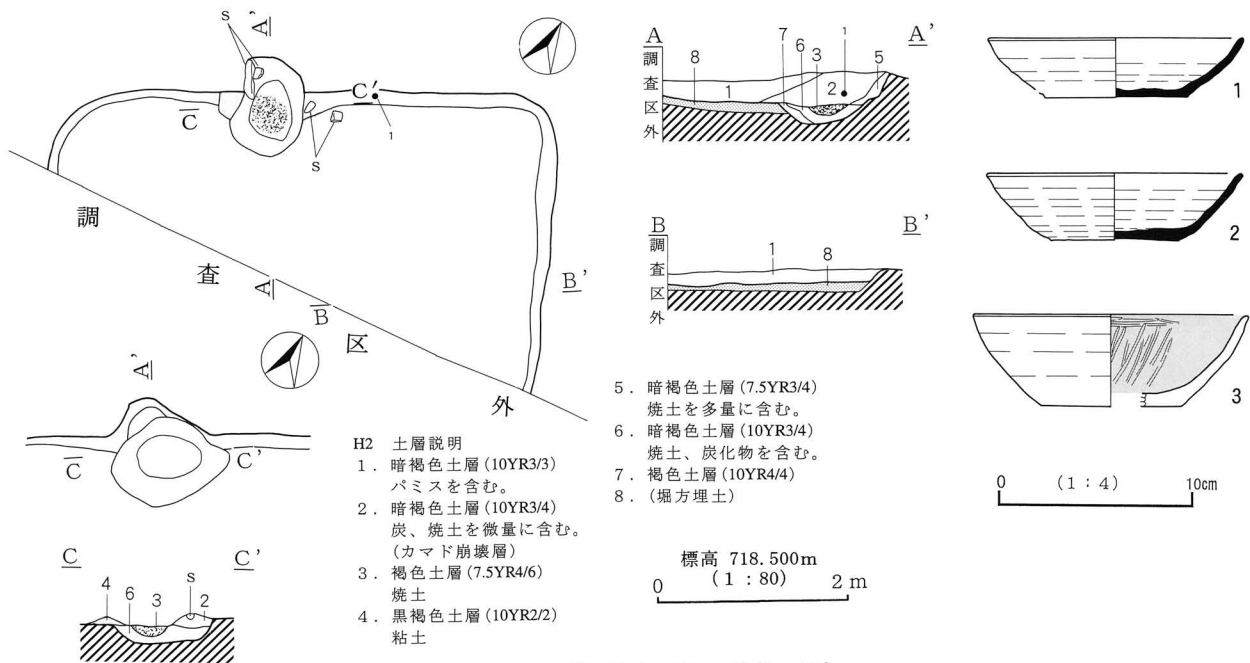
これらより9世紀後半が比定される住居である。

2) H2号住居址

Aトレンチにあり、住居の北側を調査している。南北〈1.08〉m、東西5.0m、壁高9~19cmを測る。カマドは北壁中央にあり、カマドの軸の方位はN-28°-Wを指している。カマドの西側壁には板状に礫が貼り付けられ、焼け込んでいる。カマドは粘土を貼って構築している。ピットは検出されていない。

出土遺物には須恵器、土師器がある。須恵器は実測はしていないが厚さ1.3cmで、外面に叩き目のある大型の壺か甕の破片がカマドから出土する。須恵器長頸壺の口縁部片がある。須恵器高台付杯は丸底気味の底部に高台が貼付され、高台の畳付に凹線が入る。実測資料の須恵器杯は、底部回転糸切りで、1の口縁は直線的、2の口縁は内湾し1より底径が7cmと0.5mm小さく、ロクロ痕が顕著である。土師器は武蔵甕片があるが実測はできない。土師器杯は厚手で、内面ミガキ黒色処理、底部は平底で、ヘラ削り調整がなされている。

これらより8世紀第4四半期ころから9世紀初頭が想定される住居である。



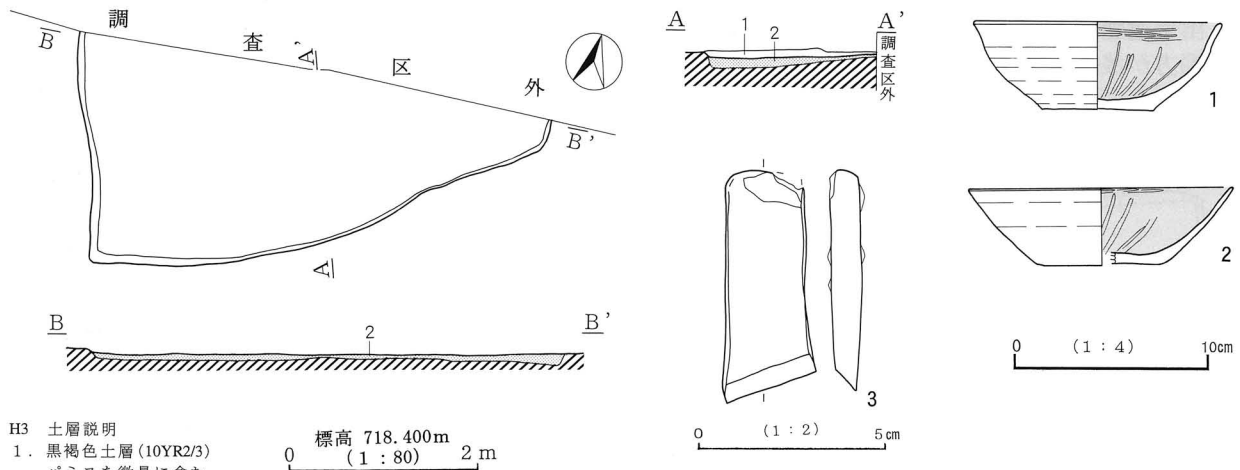
第5図 H2号住居址

3) H3号住居址

Aトレンチにあり、住居の南側を調査している。南北〈2.24〉m、東西4.76m、壁高0~11cmを測る。覆土は黒褐色土である。ピットは検出されていない。

出土遺物には灰釉陶器、須恵器、土師器がある。灰釉陶器は椀の口縁で、内外施釉される。やや軟質なものである。須恵器は甕片と底部回転糸切りの杯、天井部がヘラ削りされる蓋があるが、破片のため実測はしていない。土師器のロクロ甕、武蔵甕片もある。実測資料では土師器杯・甕と鉄製の鑿がある。土師器杯は平底で、1は底部回転糸切り、2は底部回転糸切り後ヘラ削りされる。いずれも内面は放射状の雑なミガキ後黒色処理がなされる。鑿は片刃で、長さ6.3cmを測る。

これらより、10世紀後半の住居址であろうか。

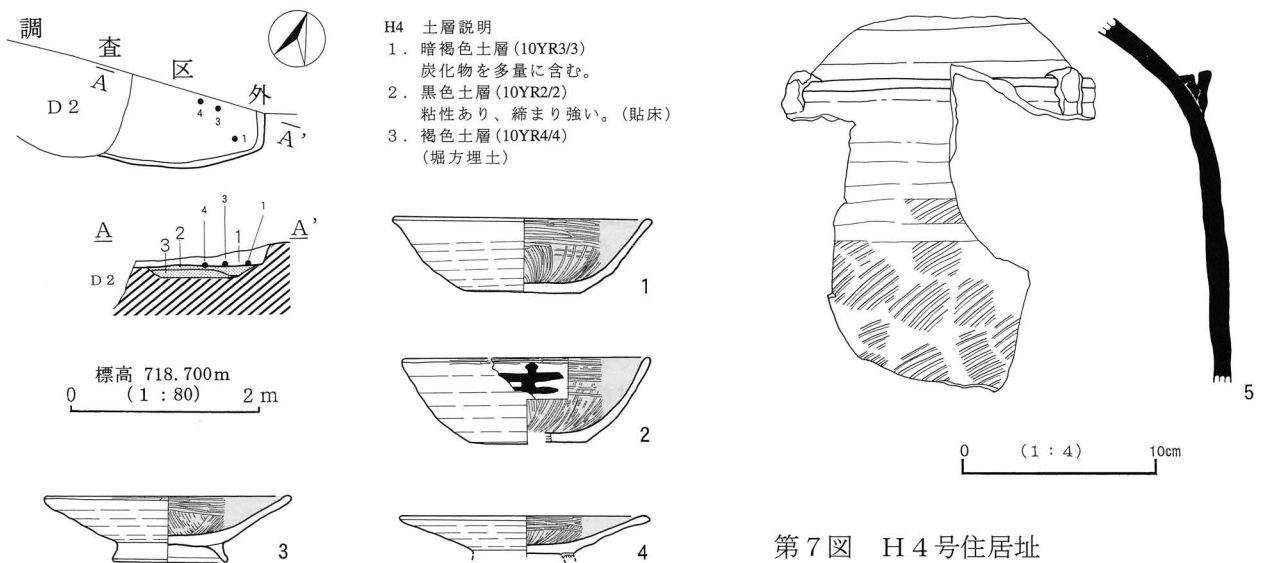


- H3 土層説明
 1. 黒褐色土層 (10YR2/3)
 パミスを微量に含む。
 2. (堀方埋土)

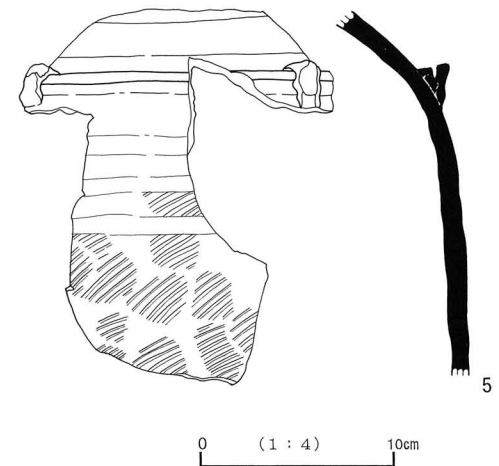
第6図 H3号住居址

4) H4号住居址

Aトレンチにあり、D2号土坑に切られている。南北〈80〉cm、東西〈148〉cmで、住居の南東部を調査している。D2の西にプランがないことから東西の規模は3m未満であろう。壁高は最大で20cmを測る。ピットは検出されていない。



- H4 土層説明
 1. 暗褐色土層 (10YR3/3)
 炭化物を多量に含む。
 2. 黒色土層 (10YR2/2)
 粘性あり、締まり強い。(貼床)
 3. 褐色土層 (10YR4/4)
 (堀方埋土)



第7図 H4号住居址

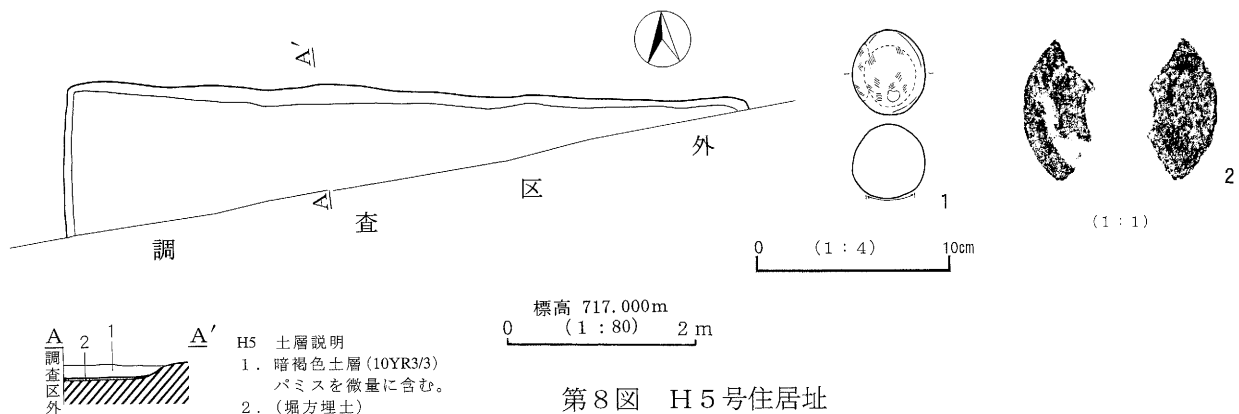
出土遺物には須恵器四耳壺、土師器武蔵甕片・杯・皿がある。四耳壺は肩に耳が貼付される。外面はナデ調整されるが、中位から下部は叩き目を残している。土師器杯は、底部回転糸切りで、内面は丁寧にミガキ調整後黒色処理される。2の杯外面には墨書があり、下部欠損ではあるが「土」までが判読できる。土師器皿は回転糸切り後高台を貼付している。内面はミガキ黒色処理されるが色変化して褐色を呈している。3の高台は外にいくらか反っている。

これらより9世紀前半の住居であろうか。

5) H5号住居址

Bトレンチにあり、南北〈1.4〉m、東西7.04m、壁高8～17cmを測る。住居の北壁を調査している。覆土は暗褐色土である。ピットは検出されていない。

出土遺物は磨石と古銭である。土器片は出土していない。古銭は1/4残存し、判読不明である。堀方が浅く、渡来銭とみられる破片があることから、中世の竪穴状遺構であろうか。



第8図 H5号住居址

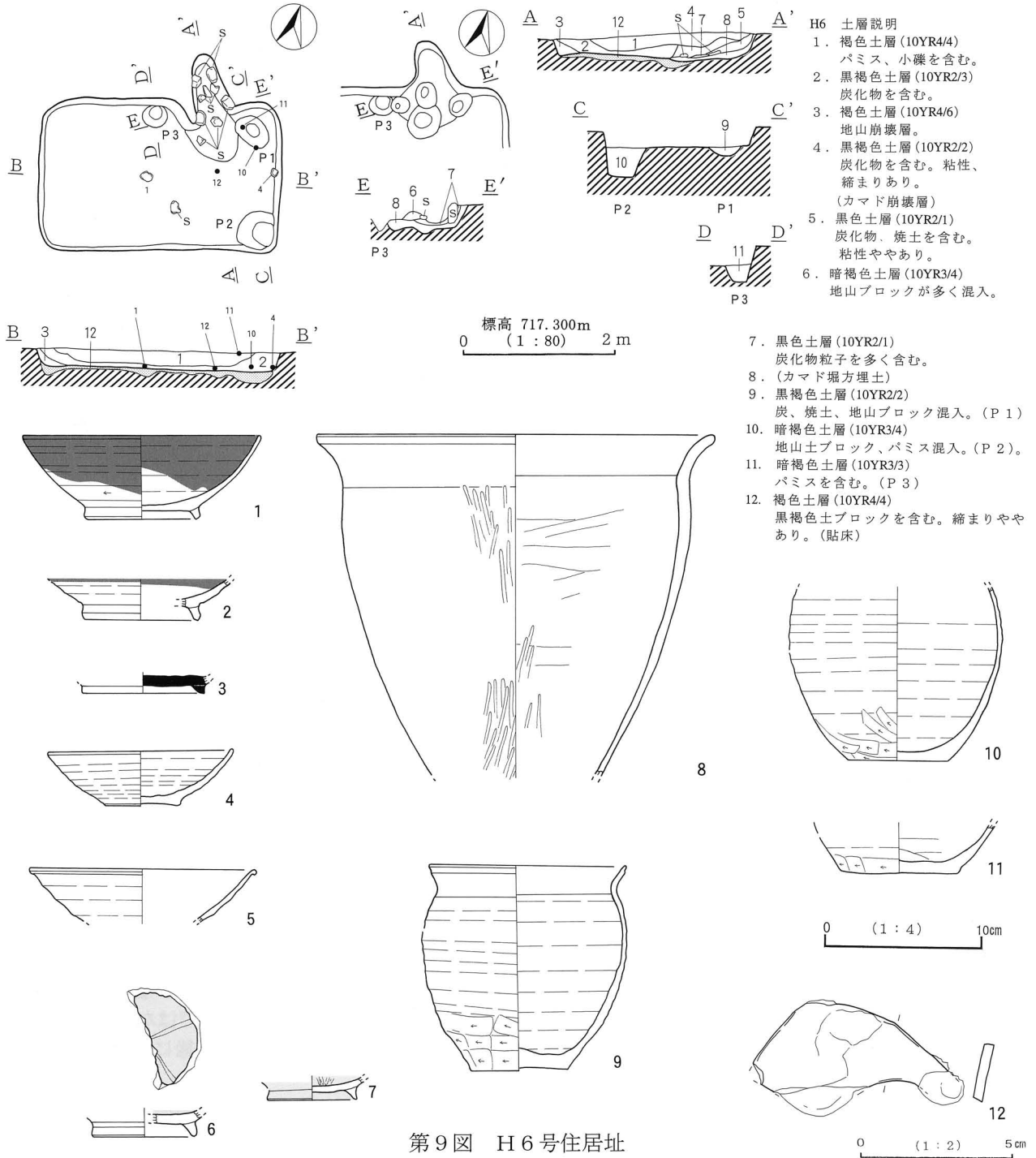
6) H6号住居址

B地点にあり、南北1.82m、東西2.98m、壁高は最大で27cm、5.4m²を測る長方形の住居である。カマドは北壁中央より東に寄っており、礫を芯材に粘土を貼って構築している。支柱穴は検出されていない。カマドの両脇にはピットがあり、東は浅いP1、西にあるやや深いP2（深さ20cm）がある。南東隅には円形の径50cm、深さ38cmの貯蔵穴がある。

出土遺物には灰釉陶器、須恵器、土師器がある。灰釉陶器は椀で、1は漬け掛けされ、高台は貼付される。高台の形態はいくらか内湾するものの断面形は四角に近いものである。2の灰釉陶器椀はハケ塗りで、貼付される高台は三日月形態を少し残している。2の須恵器高台付杯は杯部がそろって欠け落とされ、再加工され円板になっている。4の土師器杯は底部回転糸切り、内面がナデ調整である。底部径は5cmと小さく内面の黒色処理はなされていない。5の杯の口縁内面もナデ調整のみである。6の椀は口縁がきれいに欠け落ちており、円板として二次利用されたものようである。7は黒色土器の皿とみられるが、内面は丁寧なミガキ、外面と高台内面はナデ調整である。8は内面にミガキ調整があることから甕としたが、底部がないので甕であるかもしれない。9はロクロ調整の小型甕である。底部は回転糸切り、胴下部はヘラ削り、口縁は横ナデ、胴中位にロクロ痕が残っている。内面はナデ調整され、ロクロ痕は顕著ではない。やや厚みのある甕である。10のロクロ小甕は、薄手で、胴

下部・底部はヘラナデに近いヘラ削りがなされ、胴部のロクロ痕もナデられる。内面はヘラ状具でナデられ、平行に横線が残る「カキ目」になっている。11の甕の底部は回転糸切り後、弱くヘラナデがなされている。内面はナデ調整である。

これらより、本址は10世紀後半～11世紀前葉が想定される。



第9図 H6号住居址

7) H7号住居址

E地点にあり、西壁が区域外である。南北3.02m、東西(2.62)m、最大壁高41cmを測る方形に近い住居とみられる。カマドは北壁の東寄りにあり、カマドの崩壊層上面より、多量の土器を出土している。I区より出土した土師器皿からは逆位に「刑部仁丸」が2カ所、正位に「仁丸 十」が1カ所の墨書が合計3カ所にかかれた土師器碗の墨書土器が出土している。カマドは煙道上面に石を組んでおり、支脚石が直立していた。床面はしまっており、南の床下は東西に掘り込みがみられた。

主柱は住居址の中央東西にあったとみられ、東側のP1を調査した。円形で径34cm、深さ73cmを測る。東壁南寄りにあるP2はやや楕円形で長径43cm、深さ36cmを測る。

出土遺物には須恵器、土師器、鉄製品の断面長方形の角軸がある。灰釉陶器はない。須恵器はわずかで、実測個体の他に糸切り底の杯と小壺の破片ある。1の須恵器杯は底部回転糸切り後、ヘラでなでられたのか底部と口縁部が判然とせず、丸底状である。下部は張り、口縁上部は外反する。土師器は多量の杯と碗・皿・甕がある。土師器杯類は、19を除いて底部回転糸切り、いずれもミガキ黒色処理されている。6～9・11・13・18は口径に対し底径が5～6cmと小さいもので、7・13・18はやや大振りである。10・12・19は底径8cmと底径の割合が大きいものである。19は底部手持ちヘラ削りされる。2～5・14・15・17の底径は6.5cm前後の近い値である。ミガキの上に暗文を十字に施しているものは2・3・19がある。16の杯は鉢とするべきなのか大振りである。内面ミガキ黒色処理、底部糸切り後口縁下部、底部周辺が回転ヘラ削りされる。

土師器甕は武蔵甕とロクロ甕がある。武蔵甕は口縁部形態「コ」字形態である。28の外表面胴部は斜め削りに縦方向の削りの重りがみられる。ロクロ甕は胴下部に削り調整をしている。

これらより9世紀後半の住居址と想定される。

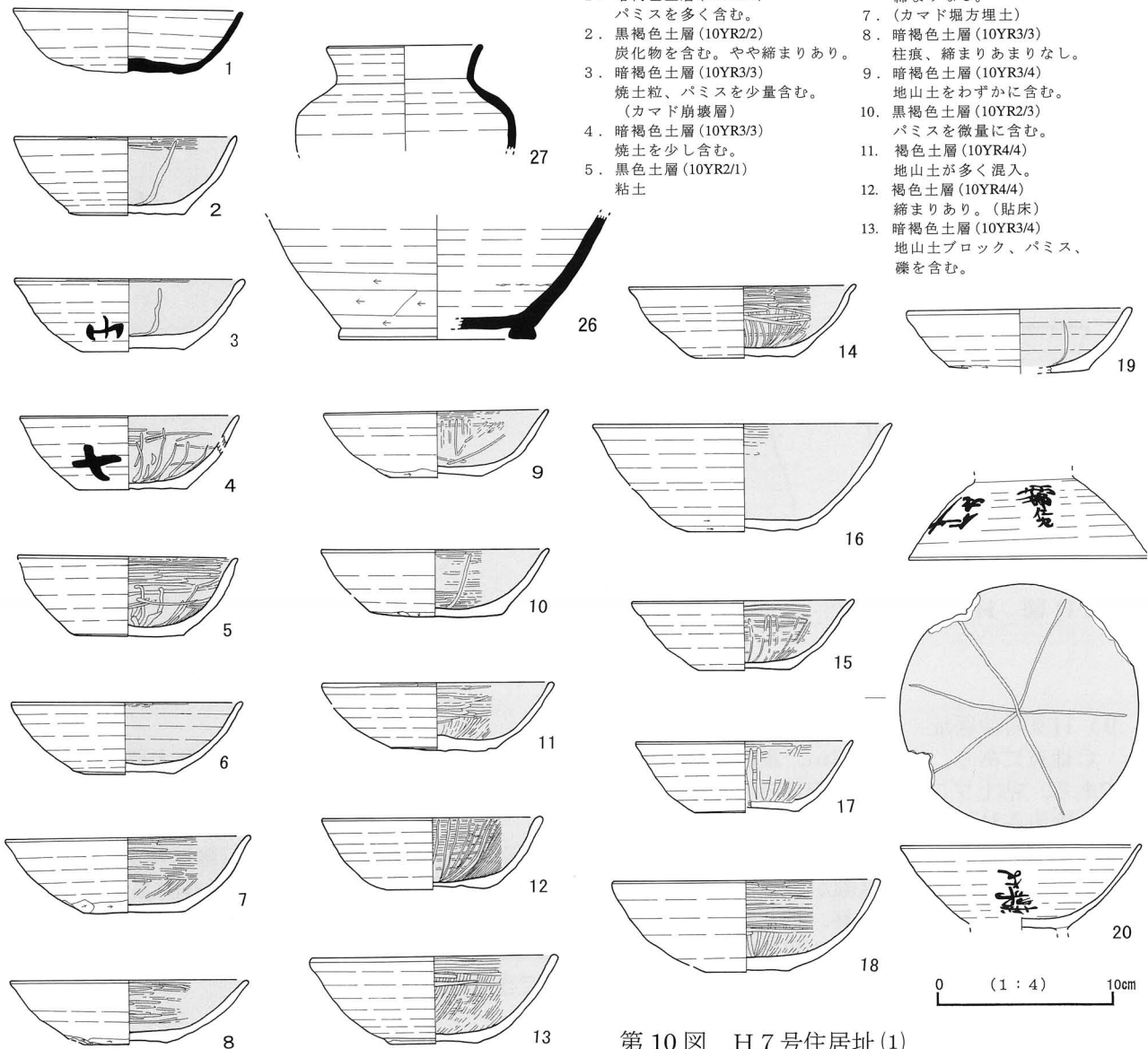
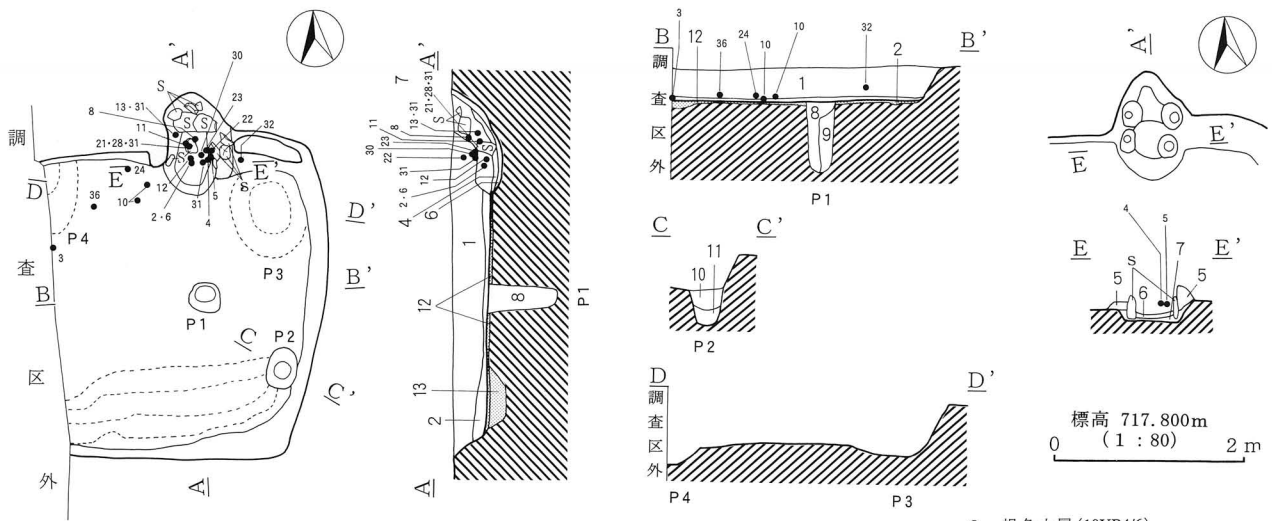
8) H8号住居址

C地点にあり、南東隅がわずかに調査できていない。南北2.97m、東西2.96mの方形の住居で、最大壁高54cmを測る。カマドは北壁中央にあり、火床は住居址の内側に設けられる。カマドの軸方位はN-6°-Wを指す。カマドは袖先端に石を立てて粘土で袖をつくり、焚き口に長さ40cmの石を乗せて焚き口としていたようである。支脚石は直立した状態で検出された。

主柱穴はP1～P4の4本で南側はピットが重複していることから立て替えがなされたようである。径40cm、深さ40cm規模のものである。P6とP7は西壁によって南北にあるピットで径は60cmと大きい深さは20cm前後である。P5は南の壁下にあり、径58cm、深さ17cmを測る。出入り口にあるピットであろう。

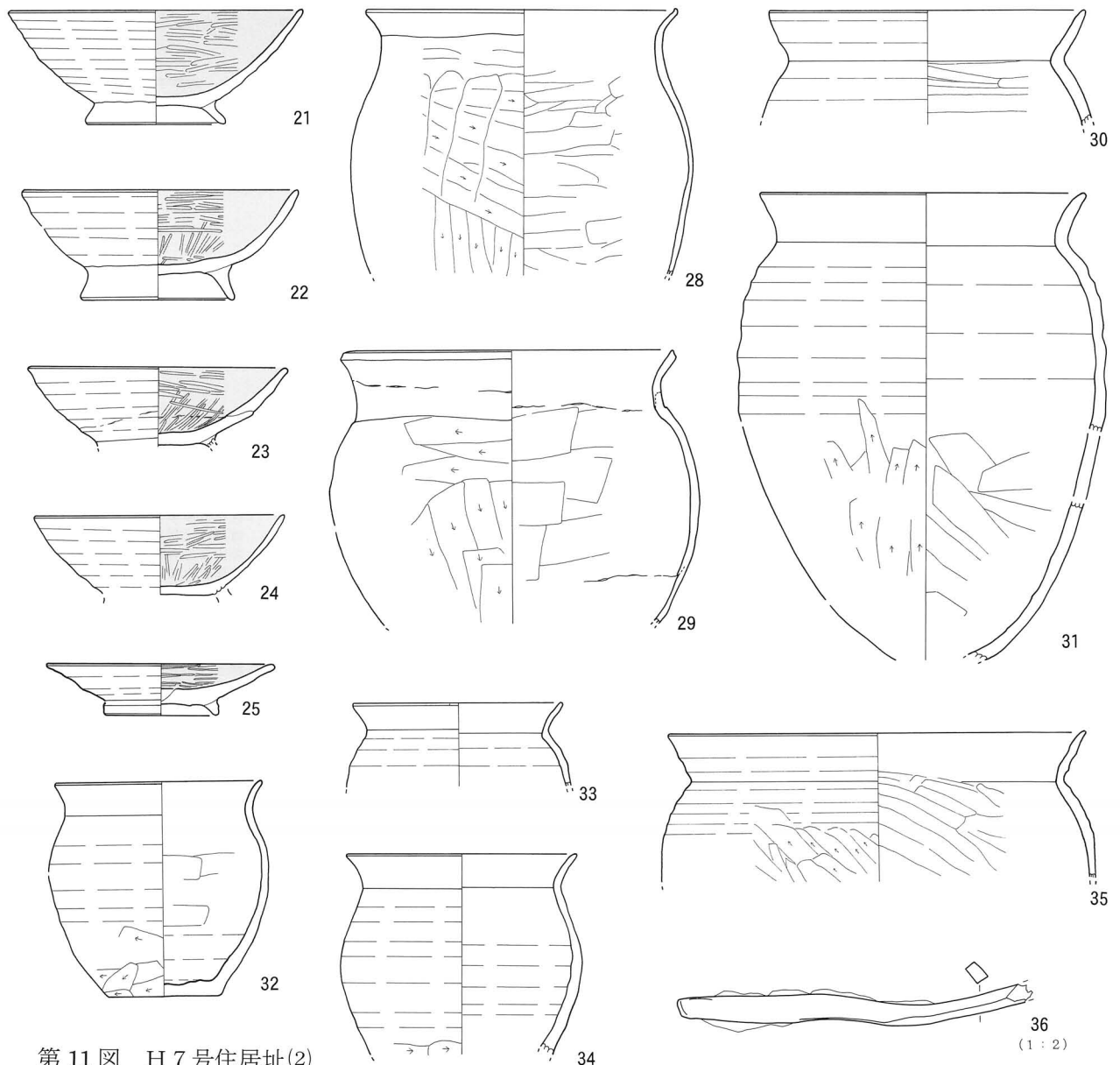
出土遺物には須恵器、土師器、石製品、鉄製品、羽口がある。須恵器は、蓋、杯、高台付杯、広口壺、長頸壺がある。1の蓋は小型の宝珠形のつまみが付き、外面天井部のヘラ削りは手持ちで不規則になされ、口縁端部の折返しはわずかである。2の須恵器杯はロクロ痕が顕著で、底部は手持ちヘラ削りされる。3の杯はナデ調整がなされ、ロクロ痕は消されている。底部は回転ヘラ切り後、回転ヘラナデされている。4の高台付杯は幅広の畳付である。内外面ナデ調整される。6は長頸壺、7・8は広口壺であろうか、8の器肉は薄い。須恵器の器種が豊富である。土師器杯は破片で少数はあるが、実測資料はない。内面ミガキ黒色処理され、底部にヘラ削りがされている。土師器甕は武蔵甕、ロクロ甕、羽釜がある。13の武蔵甕は口縁の外反強く、肩が張り肩に最大径をもつ。14の甕は口縁部が長く「く」字形を呈し、口径が大きい。15はその下部であろう。10・11は小型のロクロ甕で、胴下部・底部はヘラ削りがなされている。外面のロクロ痕はナデ調整されロクロ痕は顕著ではない。12の羽釜はロクロ調整後鏝が付けられ、口縁横ナデ、胴部ヘラ削りされている。内面は口縁にロクロ痕が顕著であるが、胴部はナデ調整される。

16・17は敲石、磨石、19は青銅製、20は鉄製鎌、21は鉄で断面円形の棒状であるが不明品である。これらより、本住居は8世紀第3四半期頃が当てられよう。



- H7 土層説明
1. 暗褐色土層 (10YR3/4)
パミスを多く含む。
 2. 黒褐色土層 (10YR2/2)
炭化物を含む。やや縮まりあり。
 3. 暗褐色土層 (10YR3/3)
焼土粒、パミスを少量含む。
(カマド崩壊層)
 4. 暗褐色土層 (10YR3/3)
焼土を少し含む。
 5. 黒色土層 (10YR2/1)
粘土
 6. 褐色土層 (10YR4/6)
焼土を含む。やや焼成をうける。
縮まりなし。
 7. (カマド堀方埋土)
 8. 暗褐色土層 (10YR3/3)
柱痕、縮まりあまりなし。
 9. 暗褐色土層 (10YR3/4)
地山土をわずかに含む。
 10. 黒褐色土層 (10YR2/3)
パミスを微量に含む。
 11. 褐色土層 (10YR4/4)
地山土が多く混入。
 12. 褐色土層 (10YR4/4)
縮まりあり。(貼床)
 13. 暗褐色土層 (10YR3/4)
地山土ブロック、パミス、
礫を含む。

第10図 H7号住居址(1)



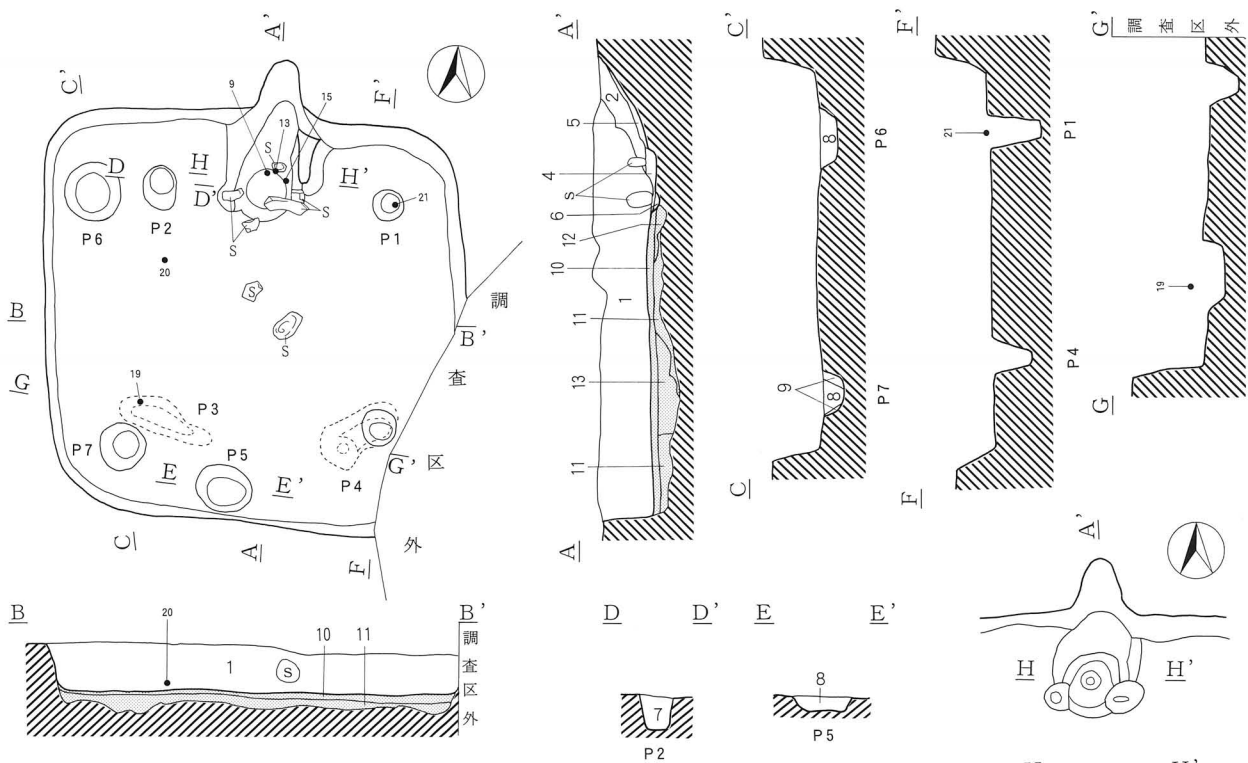
第 11 図 H 7 号住居址(2)

9) H 9 号住居址

C 地点にあり、南北3.38m、東西〈1.92〉mをはかり、住居の東半域を調査した。最大壁高は36cmである。粘土ブロックが北壁にみられ、カマドとみられるが、攪乱により壊されたようである。ピットは検出されていない。

出土遺物には須恵器、土師器、鉄製品がある。須恵器は大型品の破片がある。口縁は外反し、内外横ナデ、外面肩部には横線がのこり、内面には当て具痕残る。須恵器杯の口縁部破片も出土している。土師器は武蔵甕胴部片と杯、椀、皿がある。土師器杯類の内面はいずれもミガキ黒色処理される。9の皿は外面底部ともにミガキ黒色処理される黒色土器である。4の土師器杯は底が厚く、底部手持ちへら削りしている。5の椀の外面は墨書があるが判読できない。

これらより本住居址は9世紀前半とされよう。



H8 土層説明

- | | | |
|---|---|--|
| <p>1. 黒褐色土層 (10YR2/3)
パミスを含む。縮まりあり。</p> <p>2. 暗褐色土層 (10YR3/3)
焼土、炭、粘土ブロックを含む。
(カマド崩壊層)</p> <p>3. 暗褐色土層 (10YR3/4)
粘土</p> | <p>4. 黒褐色土層 (10YR2/3)
炭、焼土、パミスを多く含む。</p> <p>5. 暗褐色土層 (10YR3/4)
パミスを含む。縮まりなし。</p> <p>6. 黒褐色土層 (10YR2/3)
(カマド掘方埋土)</p> <p>7. 黒褐色土層 (10YR2/2)
パミスが多量に混入。</p> <p>8. 黒褐色土層 (10YR2/2)
パミスを含む。</p> | <p>9. 黒色土層 (10YR2/1)
パミスを含む。</p> <p>10. 黒色土層 (10YR2/1)
地山土ブロック混入。(粘床)</p> <p>11. 褐色土層 (10YR4/4)
地山土混入。</p> <p>12. 黒褐色土層 (10YR2/3)
パミスを多く含む。</p> <p>13. 黒褐色土層 (10YR2/2)
パミスを少量含む。縮まりなし。</p> |
|---|---|--|

標高 714.900m
0 (1:80) 2m

第12図 H8号住居址(1)

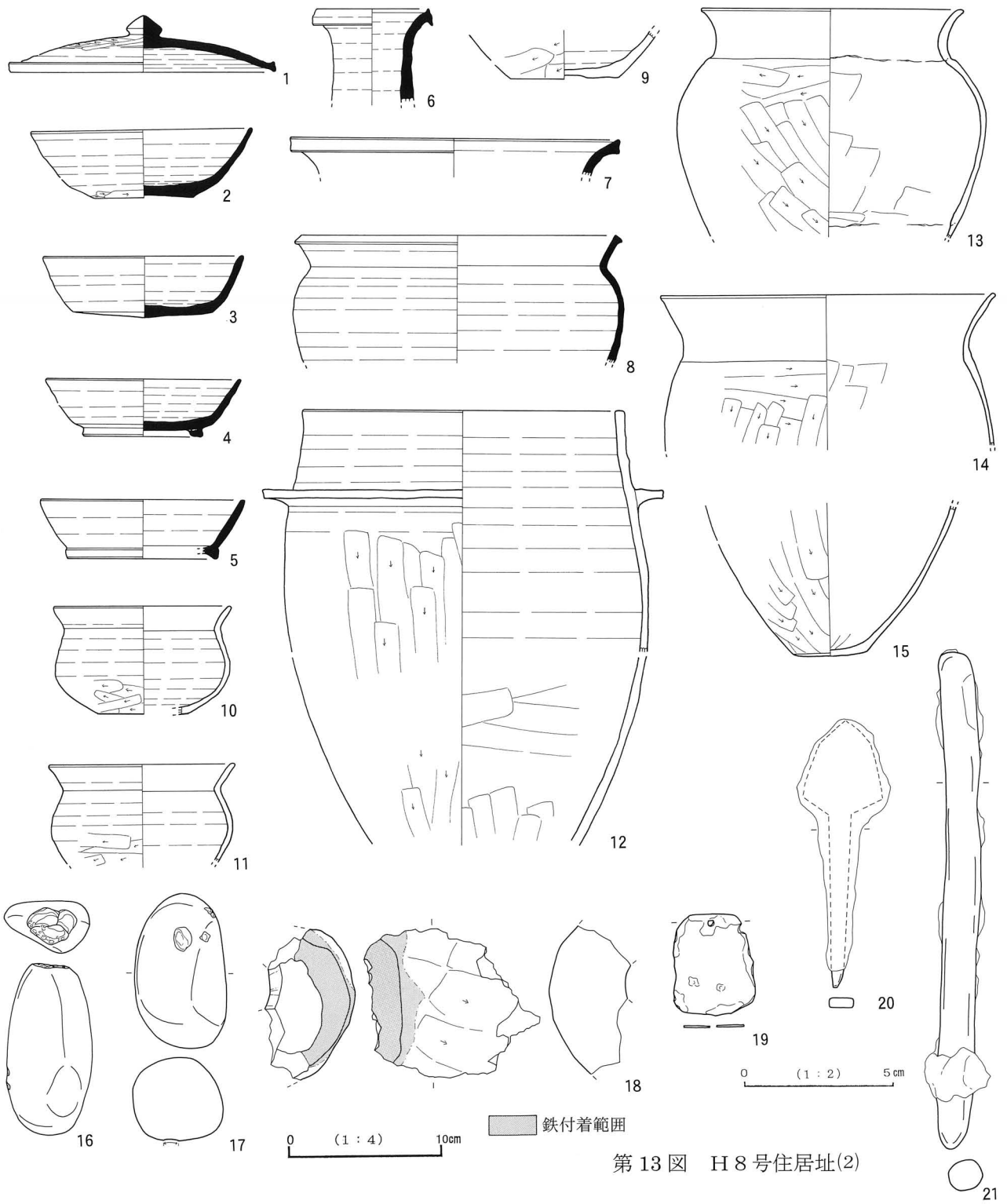
10) H10号住居址

D地点にあり、南が調査区域外である。南北〈3.34〉m、東西4.82m、最大壁高38cmを測る。カマドを北壁中央に持ち、カマドの方位はN-19°-Wを指す。カマドは礫を芯にして、粘土で構築しており、袖と火床が残っていた。床面はしまっており、粘土ブロックを含んでいる。

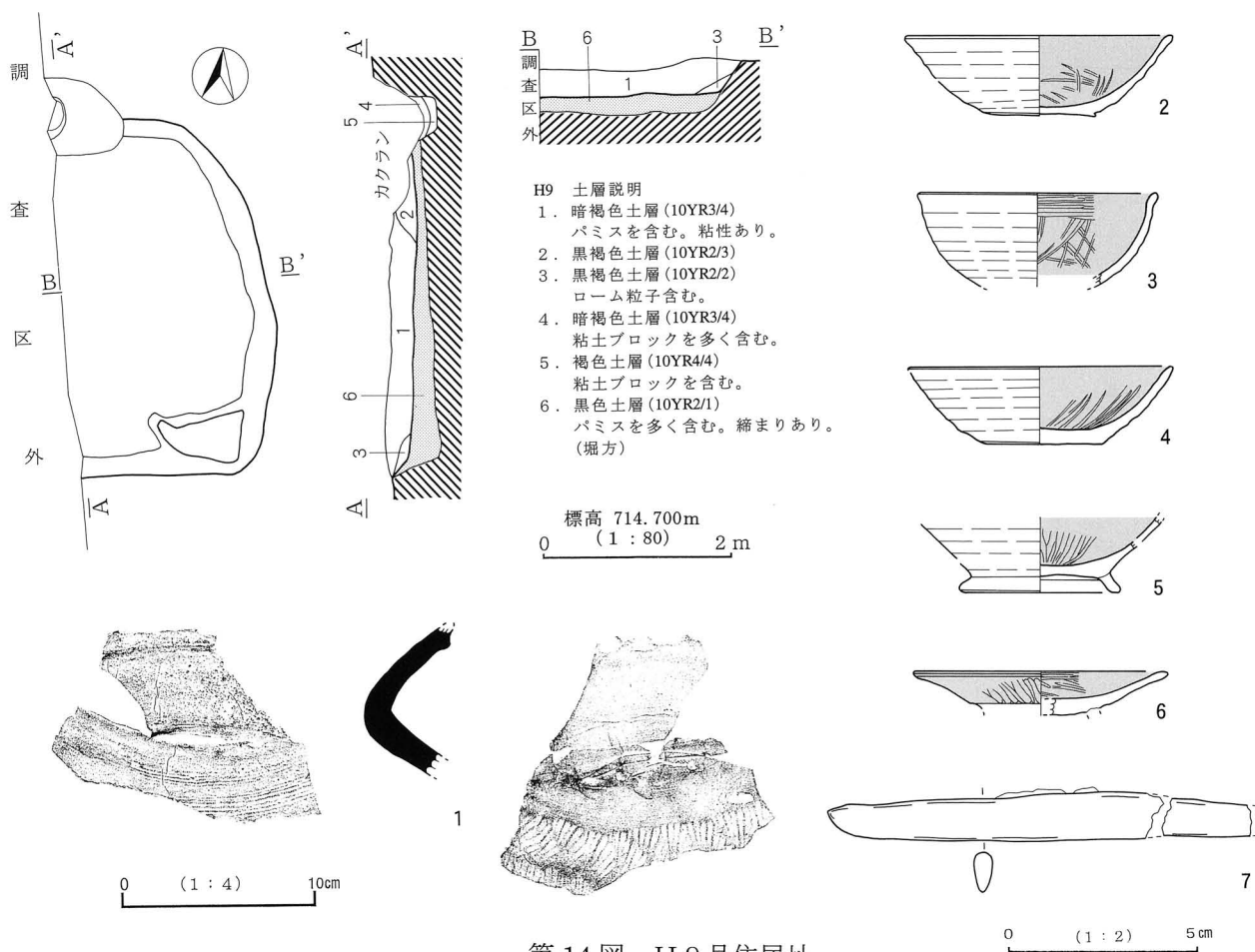
支柱穴はP1~P3の3本が方形に検出され、径46~62cm、深さ37~52cmを測る。

出土遺物には須恵器、土師器、鉄製の刀子がある。須恵器は蓋、杯、高台付杯がある。蓋は口径21cm前後と大振りであり厚手である。カマドの構築材として使用されたのか粘土が付いており、3の高台付杯とともに火床上面から出土する。須恵器杯は4・5が底部回転糸切りのままで、6はヘラ削りされる。5の底径は小さく3.7cm、4は4.6cm、6は(9.0)cmと差がある。土師器は甕形土器があり、薄手の武蔵甕である。7は口縁部形態が「く」字形である。8はやや厚みのある武蔵甕の小型甕で、胴部が扁平である。9の胴下部はヘラ削りされるが、内面にロクロナデが残っていることからロクロ甕の小甕であろう。

これらより、5の須恵器杯などから8世紀第3四半期の住居であろう。1~3の土器は前代のものである。



第 13 图 H 8 号住居址(2)



第14図 H9号住居址

11) H11号住居址

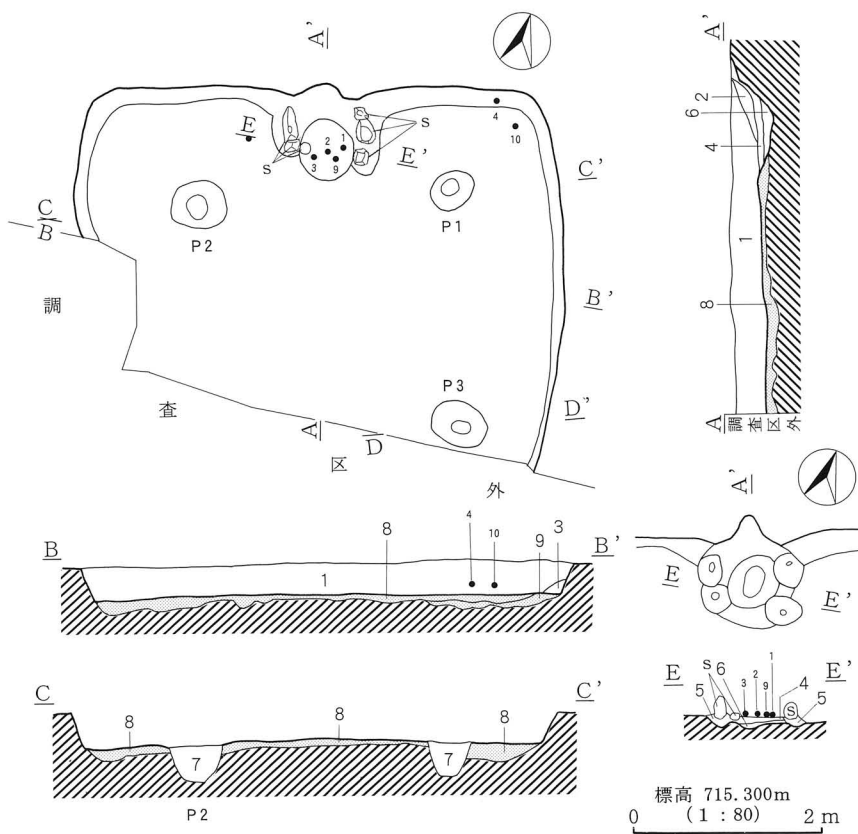
C地点にあり、住居の南半域を調査している。南北〈1.64〉m、東西3.08cm、最大壁高17cmを測る。カマドは東壁の南東隅に近くにある。焼土がみられた。柱穴は南にP1があり、径33cm、深さ19cmを測る。

出土遺物には須恵器、土師器、凝灰岩製砥石がある。須恵器杯は1・2とも底部は手持ちヘラ削りされている。土師器は甕があり、武蔵甕である。口縁部形態「く」字形である。

これらより本址は8世紀第3四半期があてられようか。

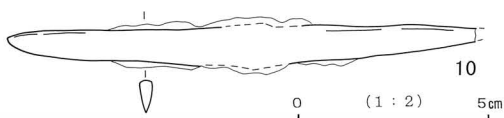
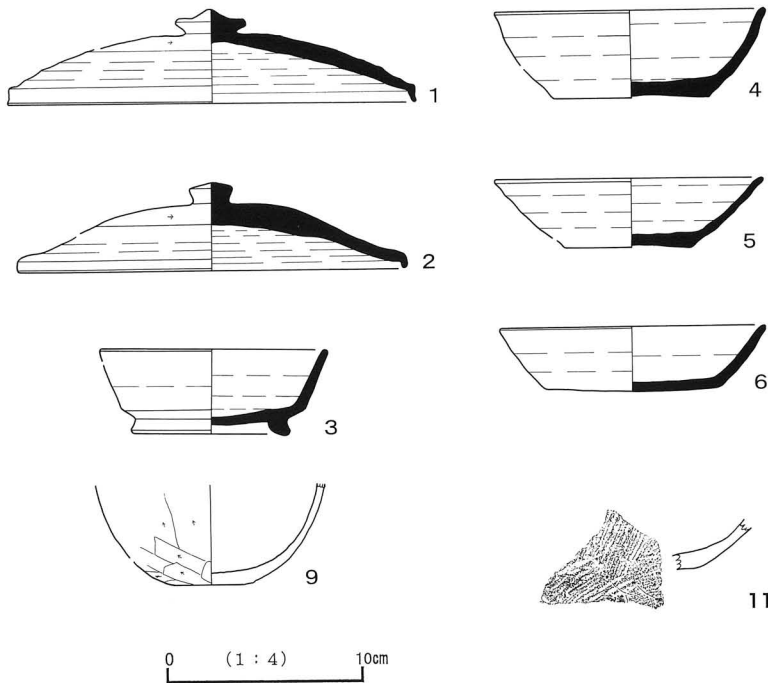
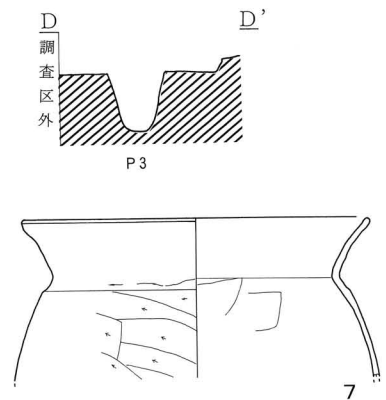
11は外面にハケ目のある土師器甕のおそらく小型甕の底部片で、胎土にウンモ粒・石英粒が含まれる。12は布目の平瓦で、表面はタタキ目、内面は布圧痕を消してヘラナデがなされている。厚さ1.4cmを測る。

また、巻頭二に示したが長さ4cm・厚さ1cmほどの漆喰片が検出面から出土している。片面は滑らかである。壁の一部と推測されるが、瓦片と関連する意味深いものか、検出であるため混入も考えられ明言はさけない。

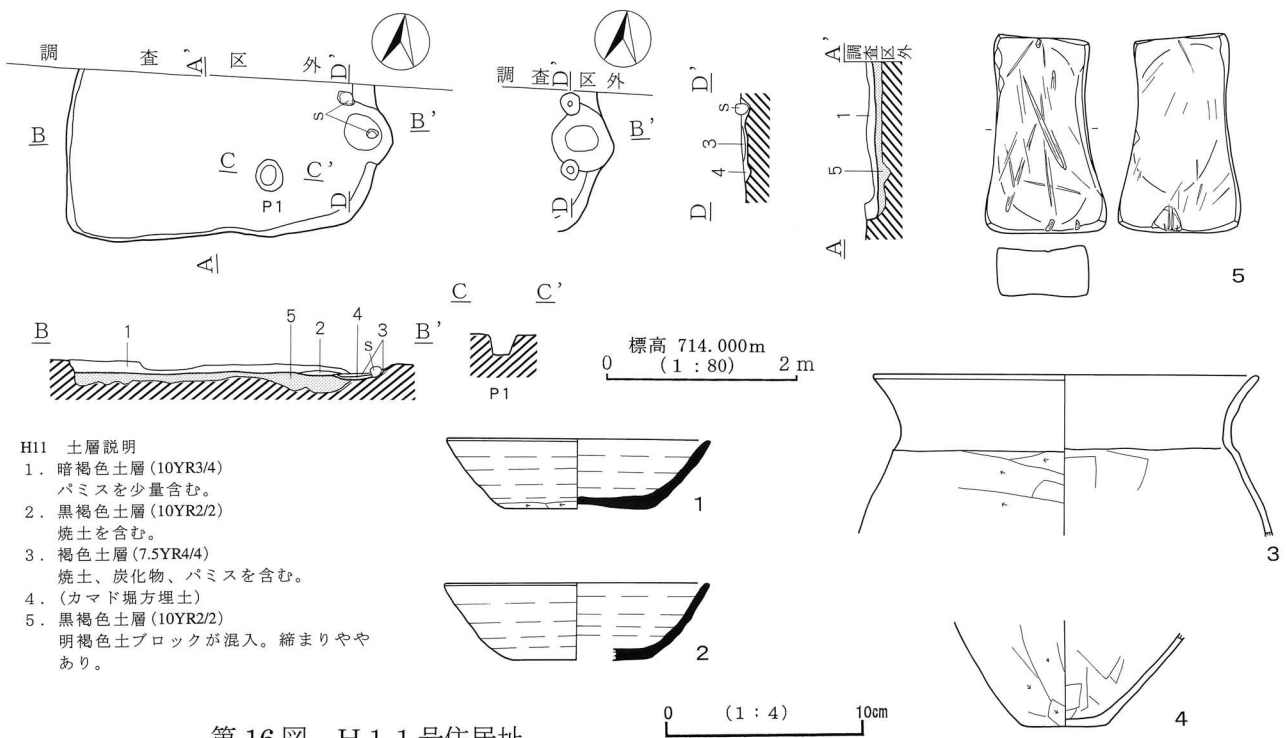


H10 土層説明

1. にぶい黄褐色土層 (10YR4/3)
パミスを含む。縮まり、粘性あり。
2. 暗褐色土層 (10YR3/3)
焼土、粘土ブロックを多く含む。
(カマド崩壊層)
3. 黒褐色土層 (10YR2/2)
ローム粒子多く含む。
4. 明黄褐色土層 (10YR6/8)
焼土、炭、粘土ブロックを含む。
5. 黒褐色土層 (10YR2/2)
粘土
6. 暗褐色土層 (10YR3/3)
焼土、炭、粘土ブロックを多量に含む。
7. 暗褐色土層 (10YR3/4)
パミスを微量に、地山土ブロックがわずかに混入。
8. にぶい黄褐色土層 (10YR4/3)
明褐色土ブロックを含む。縮まり粘土強い。(貼床)
9. 黒褐色土層 (10YR2/2)
(堀方埋土)



第15図 H10号住居址



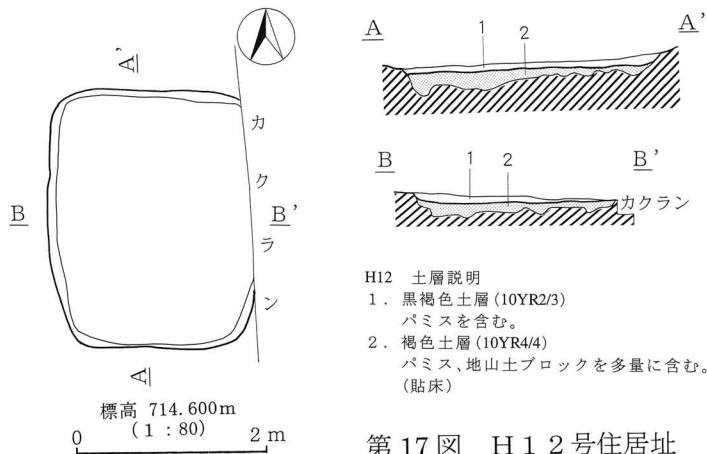
第16図 H11号住居址

12) H12号住居址

C地点にあり、東に攪乱が南北に入る。南北2.62m、東西〈2.04〉mの長方形を呈す。壁高は0～12cmである。覆土は黒褐色土層である。カマド、柱穴は検出されていない。

実測できる遺物はないが底部回転糸切りの須恵器杯、灰釉陶器は壺、段皿、皿がある。土師器は内面ミガキ、黒色処理の杯、土師器甕は武蔵甕片がある。

これらより、平安時代の住居址であろう。

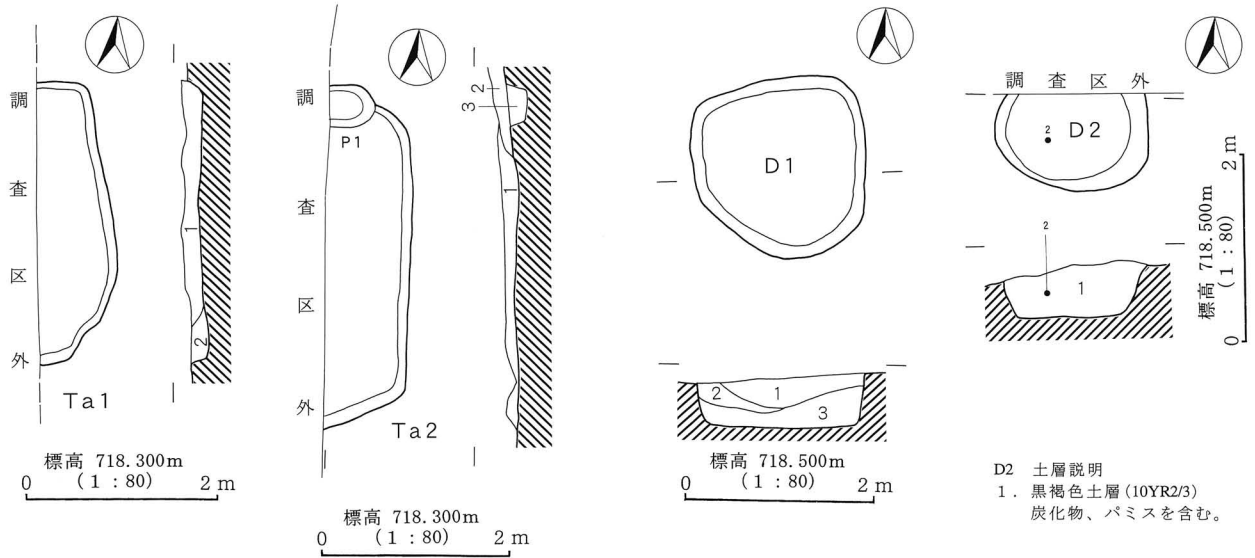


第2節 竪穴状遺構

Ta1・Ta2ともにEトレンチにあり、東側を調査している。形態も明確ではなく、出土遺物がないので時期はわからない。性格も不明である。

第3節 土坑

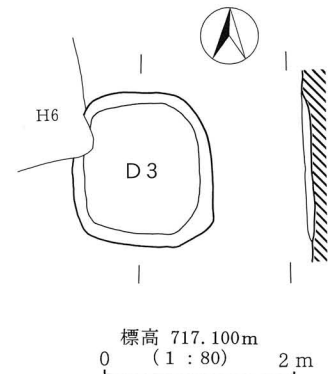
本調査では3基の土坑が検出された。D1からは須恵器大型品の甕口縁、土師器は内面ミガキ黒色処理の椀があり、D2からは鉄鎌が出土している。



- Ta1 土層説明
1. 暗褐色土層 (10YR3/3) パミスを多く含み、地山ブロックを含む。
 2. 褐色土層 (10YR4/4) パミスを多量に含む。

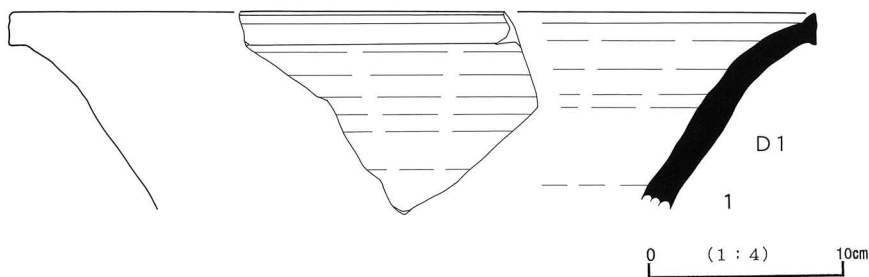
- Ta2 土層説明
1. 暗褐色土層 (10YR3/3) パミス、小礫を少し含む。
 2. 暗褐色土層 (10YR3/4) パミス、小礫を少し含む。
 3. 褐色土層 (10YR4/4) パミス、小礫を含む。

- D1 土層説明
1. 暗褐色土層 (10YR3/4) パミス、小礫を含む。
 2. 褐色土層 (10YR4/4) パミスを含む。
 3. 褐色土層 (10YR4/6) パミスを含む。



- D3 土層説明
1. 黒褐色土層 (10YR2/2) パミス、地山ブロック混入。

第18図 竪穴状遺構

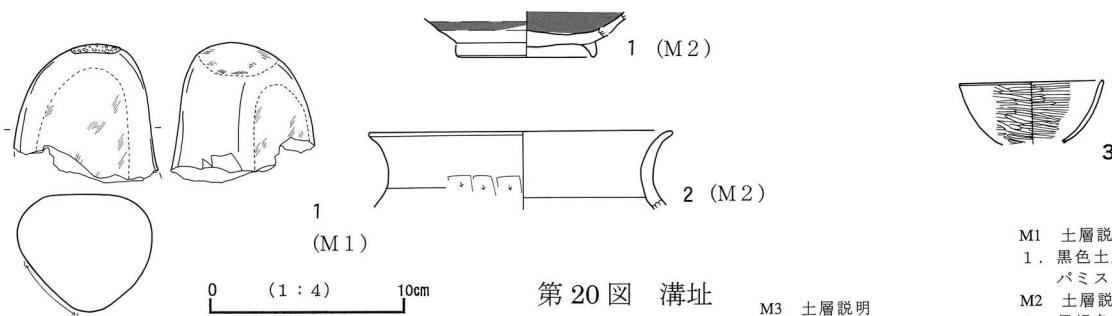
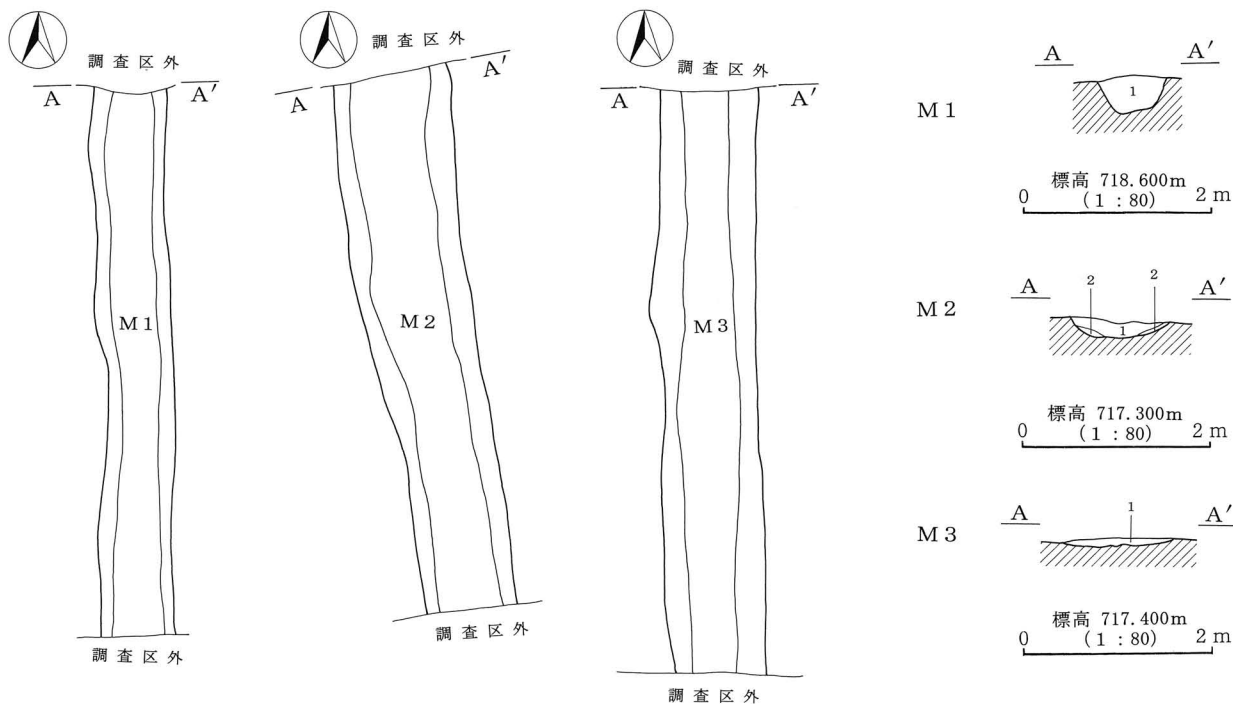


第19図 土坑



第4節 溝址

M1とM2は南北方向に連続するようである。M2から灰釉陶器碗が出土する事から平安時代の溝である。M2-2の土師器甕は丸胴甕で、古墳時代後期から奈良のもであろう。M3は遺物がないので時期は不明である。



第20図 溝址

- M1 土層説明
 1. 黒色土層 (10YR2/1)
 バミスを含む。
- M2 土層説明
 1. 黒褐色土層 (10YR2/2)
 バミス、小礫を少量含む。
 2. 黒褐色土層 (10YR2/2)
 地山土崩落層。
- M3 土層説明
 1. 暗褐色土層 (10YR3/3)
 バミスを少量含む。

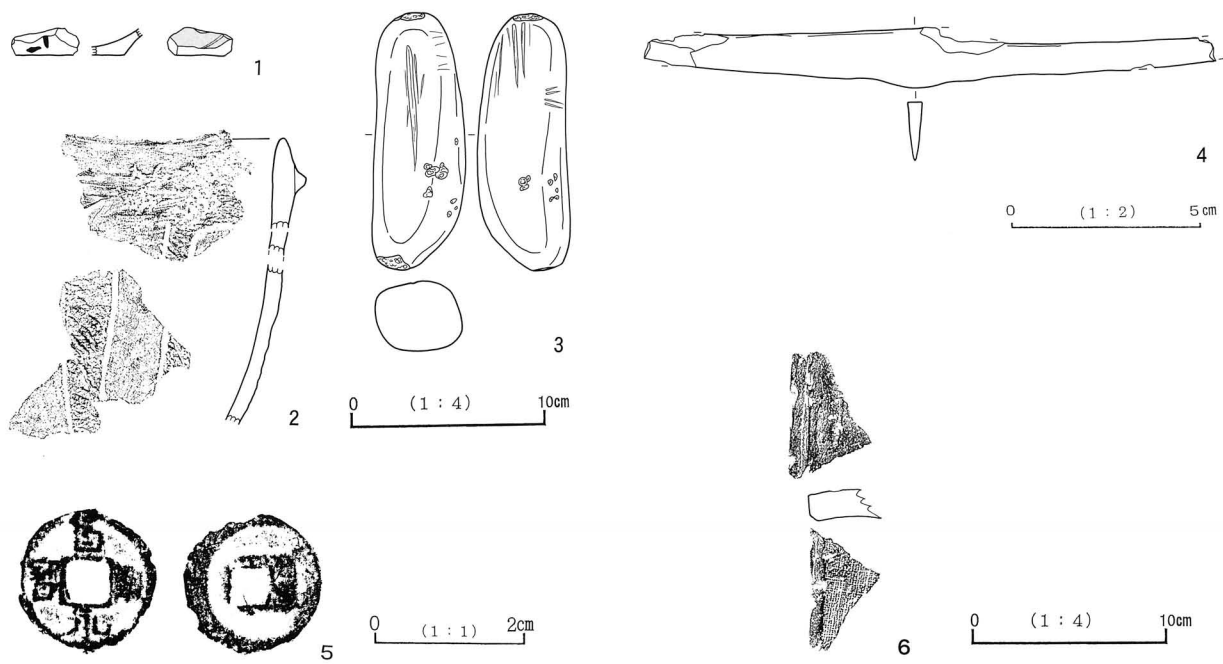
第5節 単独ピット

検出したのはC・E地点から3個である。径・深さともにあり、規模が大きいことから、掘立柱建物址の一部とみられる。

第6節 検出遺物

5の「貞観永寶」は皇朝十二銭の一つで、870年から20年間鑄造されている。皇朝十二銭のなかでは鑄銭が粗雑になり、小さくなっている。

6は丸瓦であろうか、厚さ1.3cm、内面に布目を残し、外面はヘラナデされている。縄文土器が3点ある。縄文後期称名寺で、地紋に無節の縄文、沈線区画し磨消縄文がなされる。図示していないが、H10からは縄文後期の粗製の深鉢口縁片、A地点流路からは加曾利B深鉢口縁片がある。



第 21 図 検出遺物

第IV章 まとめ

南下北原遺跡の今回の調査では奈良から平安時代の集落が確認された。奈良時代中頃に集落が開け、平安時代の10世紀頃まで継続するようである。

本調査は部分的な調査ではあったが、大きな成果を得た。H7号住居址から出土した「刑部仁丸」の墨書土器である。平安時代の百科事典『和名抄』には、佐久八郷の中に「刑部」が記されている。佐久八郷は奈良時代後半には成立していたとみられており、「刑部郷は、千曲川左岸の平坦部、岸野・野沢地区から臼田あたりの伴野庄あたりで、佐久でもっとも早く稲作の開けた地帯としている。」

(『佐久市志』P479) ちなみに本調査地点は、大井郷にあたり、岩村田を中心とした地域であり、大井発祥の地は長土呂と言う説もあり、長土呂地点からは平安時代の「大井」の刻書・墨書土器が多く出土している。既出資料「刑部」の墨書は、岩村田市街の北、高速インター付近の上久保田向遺跡IのH6(9世紀)の椀にみられた。南下北原遺跡H7号住居址が刑部郷の刑部を名乗る「刑部仁丸」という人と関係していたことは明らかである。人名を記した墨書は群衙・官寺などから出土するといわれている。(2000、高島英之『古代出土文字資料の研究』) 多量に出土した杯類も関連するのであろう。また刑部郷ではないところから出土することで、ここ長土呂地点に物や人が集まる要因があるとすれば、群衙や定額寺との関連について考慮される。

第1表 南下北原遺跡 遺構一覽表

竪穴住居址・竪穴状遺構

(残) (推定)

遺構名	検出位置	時代	形態	規模 (cm・m)			主軸方位	カマド炉	柱 穴	備 考
				南北長	東西長	壁高				
H1	A	平安	-	(256)	352	6~23	N-3°-W	北	他1	南側調査区外。
H2	A	平安	-	(180)	500	9~19	N-28°-W	北	-	南側調査区外。
H3	A	平安	-	(224)	476	0~11	N-16°-W	-	-	北側調査区外。
H4	A	平安	-	(80)	(148)	0~20	N-20°-W	-	-	北側調査区外。D2に切られる。
H5	B	不明	-	(140)	704	8~17	N-2°-E	-	-	南側調査区外。
H6	B	平安	長方形	182	298	17~27	N-18°-W	北東	貯穴1 他2	D3を切る。
H7	E	平安	-	302	(262)	25~41	N-4°-E	北東	主柱1 他1 床下2	西側調査区外。
H8	C	奈良	方形	297	296	42~54	N-6°-W	北	主柱4 他3	南東調査区外。
H9	C	平安	-	338	(192)	11~36	N-7°-W	北	-	西側調査区外。カクランに切られる。
H10	D	奈良	-	(334)	482	14~38	N-19°-W	北	主柱3	南側調査区外。
H11	C	奈良	-	(164)	308	2~17	N-82°-E	東	主柱1	北側調査区外。
H12	C	平安	長方形	262	204	0~12	N-2°-W	-	-	カクランに切られる。
Ta1	E	不明	-	284	(72)	11~18	N-4°-W	-	-	西側調査区外。
Ta2	E	不明	-	300	(80)	0~6	N-6°-W	-	他1	西側調査区外。

土坑

(残) (推定)

遺構名	検出位置	平面形	長軸長 (cm)	短軸長 (cm)	長さ (cm)	長軸方位	備 考
D1	A	不整形	192	180	60	N-7°-W	
D2	A	-	160	(104)	42	N-86°-E	北側調査区外。H4を切る。
D3	B	長方形	162	144	13	N-3°-W	H6に切られる。

溝址

(残) (推定)

遺構名	検出位置	全長 (m)	幅 (cm)	深さ (cm)	備 考
M1	A	(5.78)	72~80	22	南北調査区外。
M2	B	(6.16)	96~110	14~38	南北調査区外。
M3	B	(5.76)	92~122	5~23	南北調査区外。

単独ピット

(残) (推定)

遺構名	検出位置	規模 (cm・m)		平面形	覆 土	備 考
		長径	短径			
P1	C	46	45	円形	-	
P2	C	54	44	楕円形	-	
P3	E	88	58	楕円形	-	

() 残 () 推定

第2表 H1号住居址出土遺物一覧表

番号	種類	器種	法		調		備	考	出土位置
			口径(長)	底径(幅)	口径(長)	底径(幅)			
1	灰釉陶器	皿	(12.4)	(6.2)	施釉	施釉 糸切り後高台貼付	回転実測		Ⅲ区
2	須恵器	—	—	(1.40)	タタキ	タタキ→横ナデ	回転実測		Ⅱ区
3	土師器	杯	(13.2)	6.0	ミガキ	ミガキ→黒色処理	回転実測		Ⅰ区
4	土師器	杯	12.2	6.8	ミガキ	ミガキ→暗文→黒色処理	完全実測		No.2
5	土師器	杯	(14.1)	(5.0)	ナデ	ナデ(一部ミガキ)→黒色処理	回転実測		堀方
6	土師器	杯	13.7	6.5	ミガキ	ミガキ→暗文→黒色処理	完全実測		No.1
7	土師器	杯	(13.6)	5.3	ミガキ	ミガキ→黒色処理	回転実測		Ⅰ区
番号	種類	器種	法		備		考		出土位置
8	骨	—	最大長	最大幅	—	—	—	—	Ⅲ区
9	骨	—	(3.6)	(1.2)	—	—	—	—	P 1
10	骨	—	(6.8)	(2.2)	—	—	—	—	Ⅰ区
			(8.5)	(2.4)	—	—	—	—	Ⅰ区

() 残 () 推定

第3表 H2号住居址出土遺物一覧表

番号	種類	器種	法		調		備	考	出土位置
			口径(長)	底径(幅)	口径(長)	底径(幅)			
1	須恵器	杯	(13.6)	7.6	ロクロナデ	ロクロナデ→底部回転糸切り	完全実測		No.1
2	須恵器	杯	(13.6)	(6.8)	ロクロナデ	ロクロナデ→底部回転糸切り	回転実測		Ⅱ区
3	土師器	杯	(14.6)	(7.4)	ミガキ	ミガキ→黒色処理	回転実測		カマド

() 残 () 推定

第4表 H3号住居址出土遺物一覧表

番号	種類	器種	法		調		備	考	出土位置
			口径(長)	底径(幅)	口径(長)	底径(幅)			
1	土師器	杯	(13.2)	(6.0)	暗文風ミガキ	暗文風ミガキ→黒色処理	回転実測		Ⅰ区
2	土師器	杯	(14.0)	(6.8)	暗文風ミガキ	暗文風ミガキ→黒色処理	回転実測		Ⅰ区堀方
番号	種類	器種	法		備		考		出土位置
3	鉄製品	鑿	最大長	最大幅	—	—	—	—	西側
			(6.2)	2.5	—	—	—	—	—
			(6.2)	0.8	—	—	—	—	—
			—	—	—	—	—	—	—

() 残 () 推定

第5表 H4号住居址出土遺物一覧表

番号	種類	器種	法		調		備	考	出土位置
			口径(長)	底径(幅)	口径(長)	底径(幅)			
1	土師器	杯	13.8	6.1	ミガキ	ミガキ→黒色処理	完全実測		No.1
2	土師器	杯	(13.2)	(6.2)	ミガキ	ミガキ→黒色処理	回転実測		No.2
3	土師器	皿	13.1	6.0	ミガキ	ミガキ→黒色処理	完全実測		No.3
4	土師器	皿	13.3	—	ミガキ	ミガキ→黒色処理	完全実測		Ⅰ区トレンチ
5	須恵器	四耳壺	—	—	タタキ	タタキ→ナデ→耳貼付→肩部紐貼付	破片実測		—

() 残 () 推定

第6表 H5号住居址出土遺物一覧表

番号	種類	器種	法		調		備	考	出土位置
			口径(長)	底径(幅)	口径(長)	底径(幅)			
1	石製品	磨石	4.5	3.8	—	—	—	—	—
2	青銅	古銭	(1.9)	(0.8)	—	—	—	—	—

第7表 H 6号住居址出土遺物一覧表 () 残 () 推定

番号	種類	器種	法		量 (cm)	重量 (g)	内面	外面	備	考	出土位置
			口径 (長)	底径 (幅)							
1	灰釉陶器	碗	15.6	7.0	5.5		ロクロナデ→施釉	ロクロナデ→杯下部回転ヘラケズリ→高台貼付→施釉	回転実測		II区 No.5
2	灰釉陶器	碗	-	7.4	2.6		ロクロナデ→施釉	ロクロナデ→高台貼付→施釉	回転実測		I区
3	須恵器	高台杯	-	8.0	1.2		ロクロナデ→磨耗	高台貼付	完全実測	土板転用か	I区
4	土師器	杯	12.0	4.8	3.6		ロクロナデ	ロクロナデ→回転系切り	完全実測		No.1
5	土師器	碗	14.6	-	3.5		ナデ	ロクロナデ	回転実測		II・III区
6	土師器	碗	-	6.6	1.7		暗文→黒色処理	底部切り離し後高台貼付	回転実測		I区
7	土師器	黒色杯	-	5.8	1.5		ミガキ→黒色処理	底部切り離し→高台貼付→黒色処理	完全実測		カマド
8	土師器	甌	25.8	-	22.4		ナデ→口縁横ナデ→下部ミガキ	口縁横ナデ→ミガキ	回転実測		I区
9	土師器	小甕	12.8	6.4	13.4		ロクロナデ→口縁横ナデ	ロクロナデ→底部回転系切り→胴下部・下部ヘラケズリ	回転実測		I区 P 1
10	土師器	小甕	-	6.6	11.3		ロクロナデ	ロクロナデ→底部ヘラナデ→胴部ヘラケズリ	完全実測		No.2
11	土師器	杯	-	7.6	3.2		ナデ	ロクロナデ→胴下部・底部ヘラケズリ	完全実測		No.3
番号	種類	器種	法		量 (cm)	重量 (g)	備 考				
12	鉄製品	?	最大長	(6.8)	(3.8)	(0.7)	(37.38)				

第8表 H 7号住居址出土遺物一覧表 () 残 () 推定

番号	種類	器種	法		量 (cm)	重量 (g)	内面	外面	備	考	出土位置
			口径 (長)	底径 (幅)							
1	須恵器	杯	13.4	5.6	4.0		ロクロナデ→磨耗	ロクロナデ→底部回転系切り	完全実測		カマド
2	土師器	杯	13.0	6.7	4.7		ロクロナデ→ミガキ→十字暗文→黒色処理	ロクロナデ→底部回転系切り	完全実測		No.14
3	土師器	杯	13.4	5.9	4.3		ロクロナデ→一部ミガキ→十字暗文→黒色処理	ロクロナデ→底部回転系切り 墨書「？」	完全実測		No.6
4	土師器	杯	12.7	6.3	4.6		ロクロナデ→暗文→黒色処理	ロクロナデ→底部回転系切り 墨書「十」	完全実測		No.19
5	土師器	杯	12.8	6.5	4.7		ロクロナデ→暗文→黒色処理	ロクロナデ→底部回転系切り	完全実測		No.17
6	土師器	杯	13.6	5.7	4.3		ロクロナデ→わずかにミガキ→黒色処理	ロクロナデ→底部回転系切り	完全実測		No.11
7	土師器	杯	14.3	5.7	4.6		ロクロナデ→ミガキ→黒色処理	ロクロナデ→杯下部・底部ヘラケズリ	完全実測		カマド II区
8	土師器	杯	14.0	4.8	3.8		ロクロナデ→ミガキ→黒色処理	ロクロナデ→底部回転系切り→杯下部ヘラケズリ	完全実測		No.8
9	土師器	杯	13.4	5.5	4.0		ロクロナデ→ミガキ→黒色処理	ロクロナデ→底部回転系切り→杯下部ヘラケズリ	完全実測		カマド
10	土師器	杯	13.5	7.9	4.1		ロクロナデ→暗文(十字文)→黒色処理(色変)	ロクロナデ→底部回転系切り→底部ヘラケズリ	完全実測		No.2 No.3
11	土師器	杯	13.7	6.1	4.1		ロクロナデ→ミガキ→黒色処理	ロクロナデ	完全実測		No.13
12	土師器	杯	13.2	6.2	4.3		ロクロナデ→ミガキ→黒色処理	ロクロナデ→底部回転系切り	回転実測		No.12
13	土師器	杯	14.8	5.6	5.2		ミガキ→黒色処理	ロクロナデ→底部回転系切り	完全実測		No.20 カマド
14	土師器	杯	13.5	5.8	4.2		ミガキ→黒色処理	ロクロナデ→底部回転系切り	回転実測		カマド
15	土師器	杯	13.2	5.4	4.1		ミガキ→黒色処理 (色変)	ロクロナデ→底部回転系切り	回転実測		IV区
16	土師器	大杯	17.6	-	6.3		ミガキ→黒色処理	ロクロナデ→底部回転系切り→杯下部ヘラケズリ	回転実測		I区
17	土師器	杯	12.8	6.4	4.2		ミガキ→黒色処理	ロクロナデ→底部回転系切り	回転実測		II区
18	土師器	杯	15.8	5.0	5.4		ミガキ→黒色処理	ロクロナデ→底部回転系切り	完全実測		カマド

番号	種類	器種	法量 (cm)		調整・文様	調面	内面	外面	備考	出土位置
			口径(長)	底径(幅)						
19	土師器	坏	13.1	8.1	3.8	ロクロナデ	十字暗文→黒色処理	ロクロナデ→底部ヘラケズリ	完全実測	カマド
20	土師器	碗	14.0	-	(5.0)	ロクロナデ	ナデ→暗文→黒色処理	ロクロナデ→底部回転系切り→高台貼付 墨書3ヶ所	完全実測	I区
21	土師器	碗	17.8	8.5	6.9	ミガキ	黒色処理	ロクロナデ→底部回転系切り→高台貼付	完全実測	No.18
22	土師器	碗	16.7	9.4	6.7	ミガキ	黒色処理	ロクロナデ→底部回転系切り→高台貼付	完全実測	No.7
23	土師器	碗	15.6	-	(4.8)	ミガキ	黒色処理	ロクロナデ→底部回転系切り→高台貼付	完全実測	No.15
24	土師器	碗	15.0	-	4.9	ミガキ	黒色処理	ロクロナデ→底部回転系切り→高台貼付	完全実測	No.4 カマド III・IV区
25	土師器	皿	13.8	(7.0)	3.1	ミガキ	黒色処理	ロクロナデ→高台貼付	完全実測	カマド
26	須恵器	壺	-	(11.6)	(7.3)	ロクロナデ	ナデ	ロクロナデ→下部回転ヘラケズリ→高台貼付	回転実測	I区
27	須恵器	短頸壺	(9.2)	-	(6.2)	ロクロナデ	→口縁横ナデ	ロクロナデ	回転実測	III・IV区
28	土師器	武蔵甕	(18.8)	-	(16.0)	ハラナデ	→口縁横ナデ	胴部ヘラケズリ→口縁横ナデ	回転実測	No.18 カマド
29	土師器	武蔵甕	20.1	-	(16.6)	ハラナデ	→口縁横ナデ	ハラケズリ→口縁横ナデ	完全実測	I~IV区 P1
30	土師器	ロクロ甕	(19.0)	-	(6.5)	胴部横ナデ	→口縁ナデ	ロクロナデ	回転実測	No.16
31	土師器	ロクロ甕	(19.5)	-	(28.3)	ロクロナデ	→ハラナデ→口縁ヨコナデ	ロクロナデ→胴部ヘラケズリ→口縁横ナデ	完全実測	No.10 No.18 No.20 カマド I区
32	土師器	小型甕	(12.6)	7.0	13.0	ロクロナデ	→口縁ヨコナデ	ロクロナデ→底部回転系切り→胴部ヘラケズリ	完全実測	No.1
33	土師器	小型甕	(12.6)	-	(5.2)	ロクロナデ		ロクロナデ	回転実測	カマド
34	土師器	小型甕	(13.8)	-	(12.2)	ロクロナデ	→口縁横ナデ	ロクロナデ→胴下部ヘラケズリ	完全実測	No.18 カマド
35	土師器	ロクロ甕	(25.6)	-	(8.8)	口縁横ナデ	→胴部ヘラナデ	口縁→胴部ロクロナデ→胴部ヘラケズリ	回転実測	カマド
番号	種類	器種	法量 (cm)		備考					
36	鉄製品	刀子	最大長	最大幅	最大厚					
			(10.6)	(1.2)	(0.7)	(14.00)				

第9表 H18号住居址出土遺物一覧表 () 残 () 推定

番号	種類	器種	法量 (cm)		調整・文様	調面	内面	外面	備考	出土位置
			口径(長)	底径(幅)						
1	須恵器	蓋	(17.9)	-	3.8	ロクロナデ	ナデ	ロクロナデ→天井部手持ちヘラケズリ、宝珠つまみ貼付	回転実測	III区
2	須恵器	坏	(14.8)	6.5	4.6	ロクロナデ	磨耗	ロクロナデ→底部ヘラナデ	完全実測	I・II区
3	須恵器	坏	13.4	9.2	4.2	ロクロナデ	磨耗	ロクロナデ→ヘラ切り→ヘラケズリ	完全実測	IV区
4	須恵器	坏	(12.9)	7.9	3.9	ロクロナデ		ロクロナデ→ヘラ切り→高台貼付	完全実測	カマド III区
5	須恵器	有台坏	(13.6)	(10.0)	4.0	ロクロナデ		ロクロナデ 高台貼付	回転実測	III区
6	須恵器	壺	(7.6)	-	(6.3)	ロクロナデ		ロクロナデ	回転実測	III・IV区
7	須恵器	甕	(22.2)	-	(2.5)	ロクロナデ	→横ナデ	ロクロナデ→横ナデ	回転実測	III区
8	須恵器	壺	(21.2)	-	(8.6)	ロクロナデ	→横ナデ	ロクロナデ→横ナデ	回転実測	III区
9	土師器	小甕	-	7.3	(3.2)	ロクロナデ		ハラケズリ 底部ヘラナデ	完全実測	No.1
10	土師器	小型甕	(11.8)	(6.0)	7.3	ロクロナデ	→口縁横ナデ	ロクロナデ→下部ヘラケズリ	回転実測	カマド I区
11	土師器	小甕	(12.4)	-	(6.7)	ロクロナデ	→口縁横ナデ	ロクロナデ→下部ヘラケズリ	回転実測	I区
12	土師器	羽釜	21.7	-	(29.4)	ロクロナデ	→ハラナデ→口縁横ナデ	ロクロナデ→つば貼付→口縁横ナデ 胴下部ヘラケズリ	完全実測	I区 カマド

番号	種類	器種	法量 (cm)		内面	外面	備考	号	出土位置
			口径(長)	底径(幅)					
13	土師器	武藏甕	(17.6)	(15.4)	ナデ→口縁横ナデ	胴部ヘラケズリ→口縁横ナデ	口広長測	No.2 カマミ	
14	土師器	武藏甕	22.4	(10.4)	ナデ→口縁横ナデ	胴部ヘラケズリ→口縁横ナデ	口広長測	No.1 I・I区	
15	土師器	武藏甕	-	(10.2)	ナデ	ヘラケズリ	口広長測	No.3 カマミ	
番号	種類	器種	法量 (cm)		備考			出土位置	
			最大長	最大幅					
16	石製品	編物石	11.6	3.4	局所にスリ面あり	片面上部に敲打痕		II区	
17	石製品	編物石	10.5	5.6	局所にスリ面あり	正裏の凹みは敲き痕? 安山岩		No.4	
18	土製品	羽口	(5.9)	(2.7)	上部鉄付着	外面ヘラケズリ		I区	
19	銅製品	帯金具	3.5	0.1				No.3	
20	鉄製品	鉄銚	9.2	1.5				No.4	
21	鉄製品	?	17.0	2.2				No.5	

第10表 H9号住居址出土遺物一覧表

番号	種類	器種	法量 (cm)		内面	外面	備考	号	出土位置
			口径(長)	底径(幅)					
1	須恵器	甕	-	-	ロクロナデ 自然軸付着	ロクロナデ 自然軸付着	拓本	I区	
2	土師器	坏	14.0	4.2	ミガキ→黒色処理	ロクロナデ→底部回転系切り	完全実測	I区	
3	土師器	坏	(12.6)	(5.0)	ミガキ→黒色処理	ロクロナデ	回転実測	I区	
4	土師器	坏	(13.9)	4.1	ミガキ→黒色処理	ロクロナデ→底部ヘラケズリ	完全実測	I区	
5	土師器	碗	-	8.4	ミガキ→黒色処理	ロクロナデ→切り離し後高台貼付 墨書「?」	完全実測	II区	
6	土師黒色土器	皿	(13.4)	(2.3)	ミガキ→黒色処理	高台貼付	回転実測	I区	
番号	種類	器種	法量 (cm)		備考			出土位置	
			最大長	最大幅					
7	鉄製品	刀子	(11.1)	(1.0)				II区	

() 残 () 推定

第11表 H10号住居址出土遺物一覧表

番号	種類	器種	法量 (cm)		内面	外面	備考	号	出土位置
			口径(長)	底径(幅)					
1	須恵器	蓋	(21.6)	5.0	ロクロナデ→ナデ	ロクロナデ→天井部ヘラケズリ→つまみ貼付	完全実測	No.3	
2	須恵器	蓋	(20.6)	4.6	ロクロナデ→ナデ	ロクロナデ→ヘラケズリ→つまみ貼付	完全実測	No.5 IV区 検出	
3	須恵器	高台坏	(12.0)	4.5	ロクロナデ→ナデ	ロクロナデ→切り離し後高台貼付	完全実測	No.6	
4	須恵器	坏	(14.4)	4.6	ロクロナデ→ナデ	ロクロナデ→底部回転系切り	完全実測	No.2	
5	須恵器	坏	(14.3)	3.7	ロクロナデ→ナデ	ロクロナデ→底部回転系切り	完全実測	検出	
6	須恵器	坏	(14.0)	(9.0)	ロクロナデ	ロクロナデ→ヘラケズリ	回転実測	III区	
7	土師器	武藏甕	(18.4)	-	ナデ→口縁横ナデ	口縁横ナデ 胴部ヘラケズリ	回転実測	P1	
8	土師器	小甕	(11.8)	4.8	横ナデ→ヘラケズリ	横ナデ→ヘラケズリ	完全実測	I・IV区	
9	土師器	小甕	-	4.3	ロクロナデ	胴下部・底部ヘラケズリ	完全実測	No.4 カマド I区	
番号	種類	器種	法量 (cm)		備考			出土位置	
			最大長	最大幅					
10	鉄製品	刀子	(12.3)	(1.5)				No.1	

() 残 () 推定

番号	種類	器種	法		内面	外面	備	考	出土位置
			口径(長)	底径(幅)					
11	土師器	甕	-	-	ナデ	ハケ目	拓本	胎土にウーンモ「北野製」	Ⅲ区
12	瓦質	瓦	-	-	布目→ハラナデ	タタキ	拓本		Ⅰ区

第12表 H111号住居址出土遺物一覧表 () 残 () 推定

番号	種類	器種	法		内面	外面	備	考	出土位置
			口径(長)	底径(幅)					
1	須恵器	坏	14.0	7.4	ロクロナデ	ロクロナデ→底部ハラナデ(ハラケズリ)	完全実測		カマト
2	須恵器	坏	14.1	7.9	ロクロナデ	ロクロナデ→底部ハラナデ	完全実測		Ⅱ区
3	土師器	武蔵甕	20.4	-	ナデ→口縁横ナデ	口縁横ナデ 胴部ハラケズリ	回転実測		カマト
4	土師器	武蔵甕	-	4.6	ナデ	ハラケズリ	完全実測		カマト
番号	種類	器種	法		備		考		
			最大長	最大幅					
5	石製品	砥石	10.5	6.4	砥面数6	正裏に条痕(幅広)と線状痕(細い) 凝灰岩			

第13表 土坑出土遺物一覧表 () 残 () 推定

番号	種類	器種	法		内面	外面	備	考	出土位置
			口径(長)	底径(幅)					
1	須恵器	甕	(42.8)	-	ロクロナデ	ロクロナデ	回転実測		D 1
番号	種類	器種	法		備		考		
			最大長	最大幅					
2	鉄製品	鎌	(13.4)	(3.6)					D 2-No.1

第14表 M1号溝址出土遺物一覧表 () 残 () 推定

番号	種類	器種	法		内面	外面	備	考	出土位置
			最大長	最大厚					
1	石製品	磨・砥石	(7.4)	(7.4)	下部欠損	上端部に敲打痕 正裏・上側にすり面 火熱を受ける。安山岩			

第15表 M2号溝址出土遺物一覧表 () 残 () 推定

番号	種類	器種	法		内面	外面	備	考	出土位置
			口径(長)	底径(幅)					
1	灰種陶器	椀	-	7.1	(2.4)	ロクロナデ→ナデ→施軸	完全実測		
2	土師器	甕	(16.0)	-	口縁横ナデ	口縁ヨコナデ→胴部ハラケズリ	回転実測		
3	土師黒色土器	小坏	7.6	-	ミガキ	ミガキ→黒色処理	回転実測	内面に赤色物質付着	

第16表 検出土遺物一覧表 () 残 () 推定

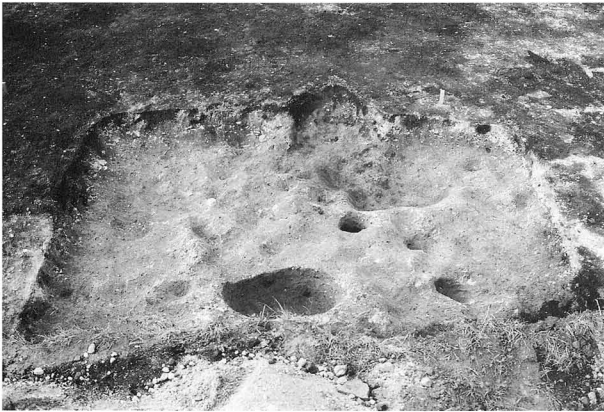
番号	種類	器種	法		内面	外面	備	考	出土位置
			口径(長)	底径(幅)					
1	土師器	坏	-	-	暗文→黒色処理	ロクロナデ→底部糸切り 墨書	破片実測		検出
2	縄文	深鉢	-	-	ミガキ		拓本		検出
番号	種類	器種	法		備		考		
			最大長	最大幅					
3	石製品	砥石	13.6	5.0	3.8	368.81			検出
4	鉄製品	刀子	(15.0)	(1.6)	(0.4)	(19.06)			検出
5	青銅	古銭	1.9	1.9	0.1	1.76			検出
番号	種類	器種	法		備		考		
			口径(長)	底径(幅)	器高(厚)	(g)			
6	瓦質	瓦	-	-	-	-			検出



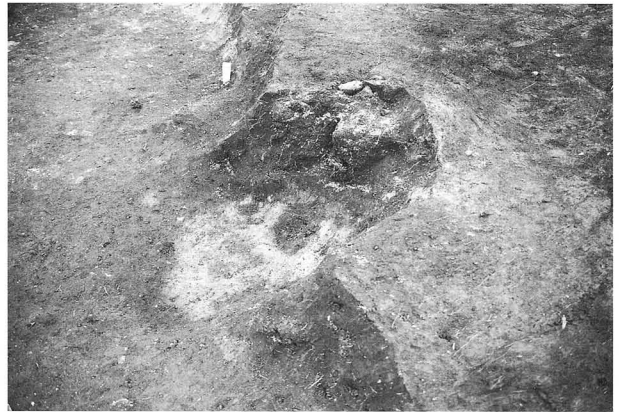
H1 完掘 (南より)



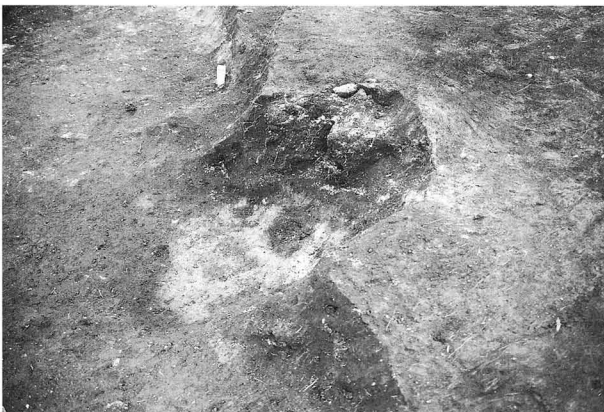
H1 カマド完掘 (南より)



H1 堀方 (南より)



H2 完掘 (南より)



H2 カマド完掘 (東より)



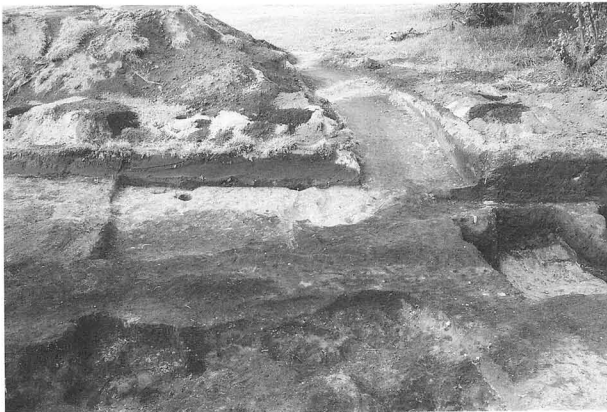
H2 カマド堀方 (東より)



H2 堀方 (南より)



H3 完掘 (南より)



H3 堀方 (南より)



H4 完掘 (南より)



H4 堀方、D2 完掘 (南より)



H5 完掘 (西より)



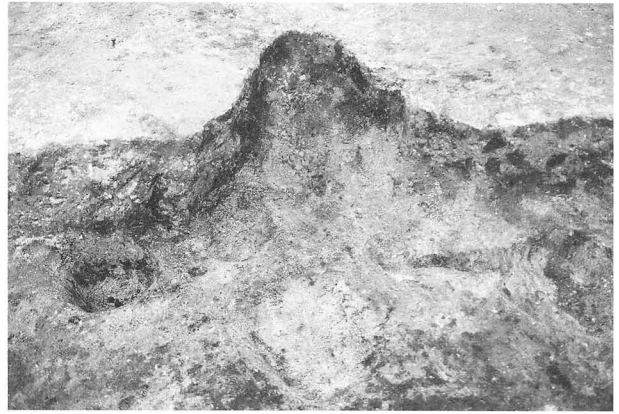
H5 堀方 (西より)



H6 完掘 (南より)



H6 カマド完掘 (南より)



H6 カマド堀方 (南より)



H6 堀方 (南より)



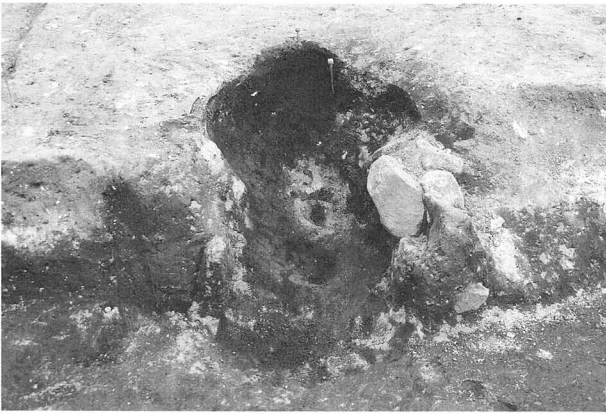
H7 完掘 (南より)



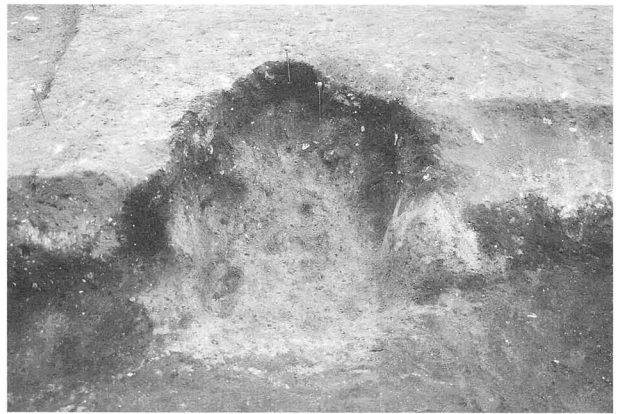
H7 カマド遺物出土状況 (南より)



H7 カマド完掘 (南より)



H7 カマド堀方① (南より)

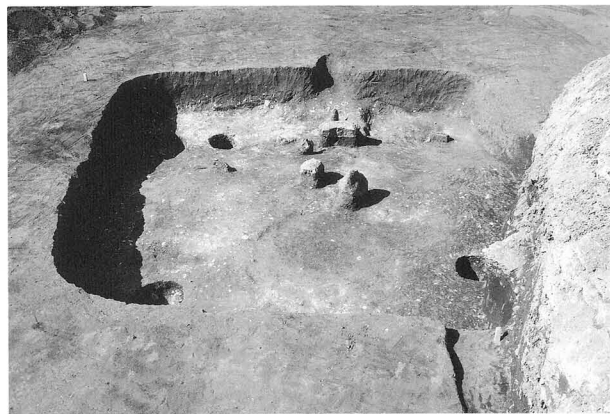


H7 カマド堀方② (南より)

図版四
H7～H9



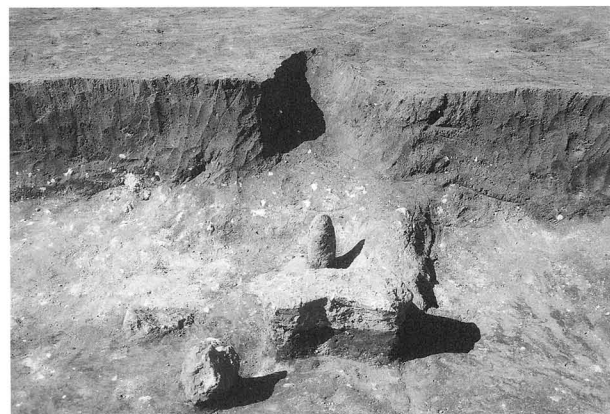
H7 堀方（南より）



H8 完掘（南より）



H8 金具出土状況（南より）



H8 カマド完掘（南より）



H8 カマド堀方（南より）



H8 堀方（南より）



H9 完掘（南より）



H9 堀方（南より）



H10 完掘 (南より)



H10 カマド完掘 (南より)



H10 カマド堀方 (東より)



H10 堀方 (西より)



H11 完掘 (西より)



H11 カマド完掘 (西より)



H11 カマド堀方 (西より)



H11 堀方 (西より)

図版六
H12・竪穴状遺構・D1・M1



H12 完掘（南より）



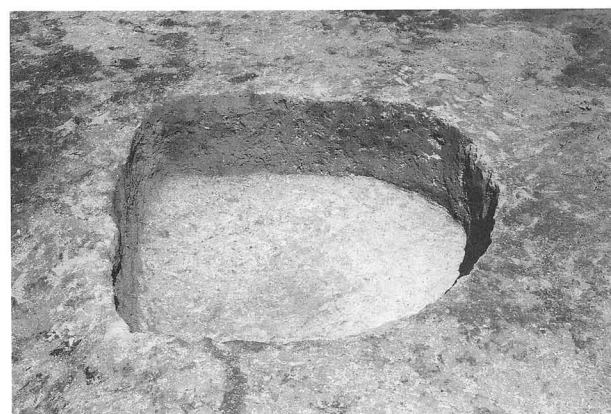
H12 堀方（南より）



Ta1 完掘（南より）



Ta2 完掘（南より）



D1 完掘（西より）



M1 完掘（南より）



M2 完掘 (南より)



M3 完掘 (南より)



A地点 (西より)



B地点 (西より)



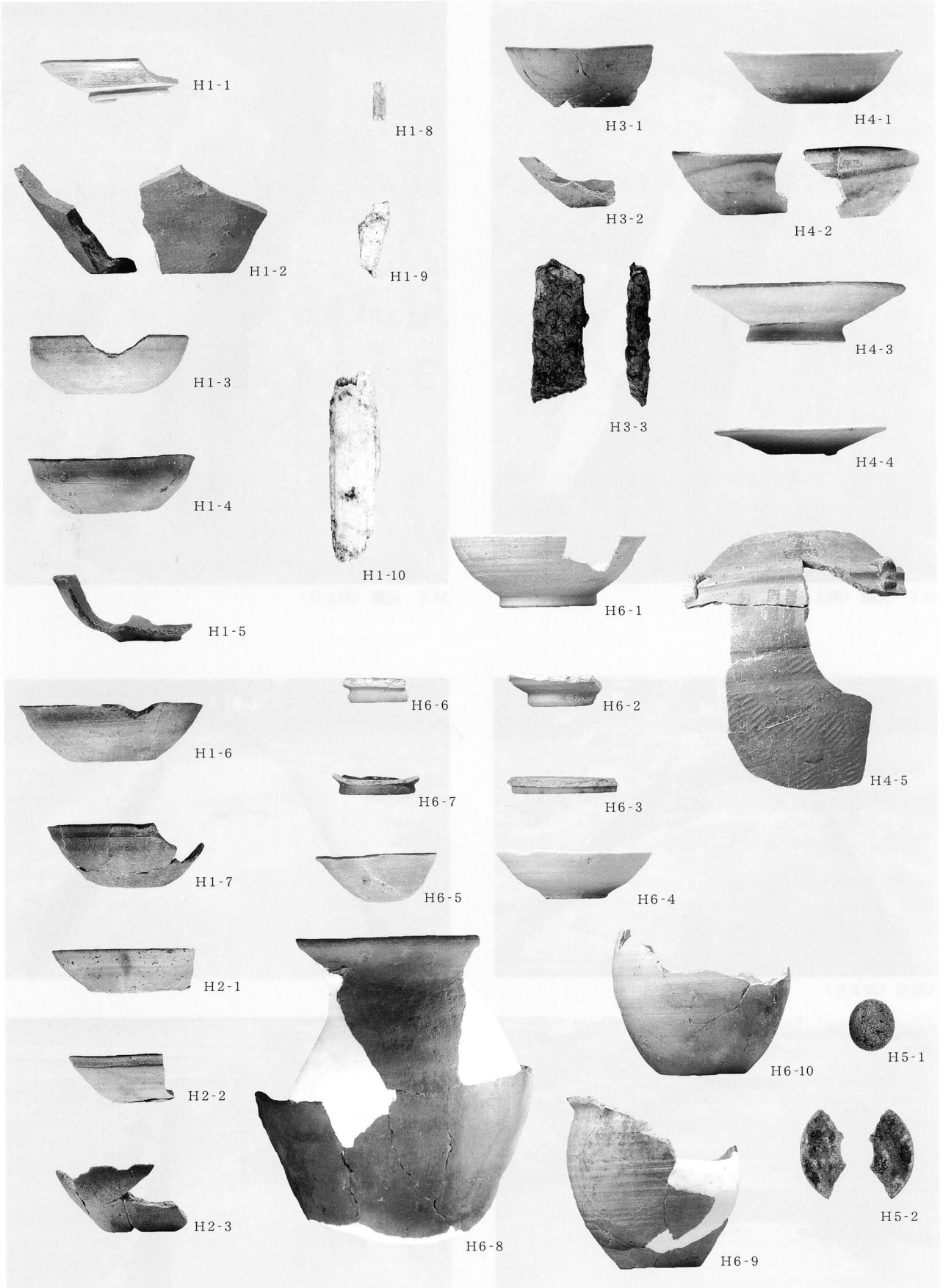
C地点 (北より)



C地点南 (西より)

図版八

H1
H6

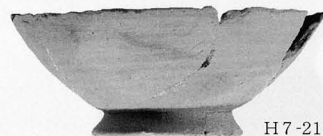




H7-1



H7-11



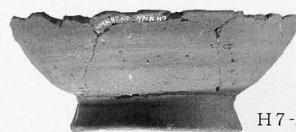
H7-21



H7-2



H7-12



H7-22



H7-3



H7-13



H7-23



H7-4



H7-14



H7-24



H7-5



H7-15



H7-25



H7-6



H7-16



H7-26



H7-27



H7-7



H7-17



H7-18



H7-28



H7-8



H7-19



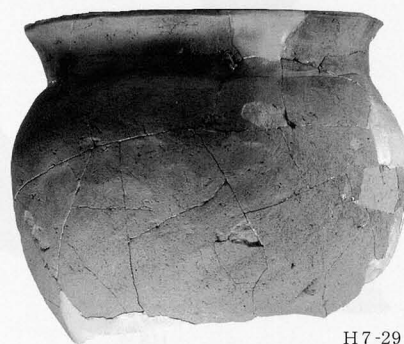
H7-9



H7-20

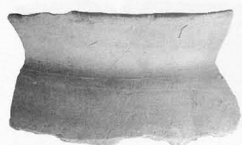


H7-10



H7-29

图版十
H7·H8



H7-30



H7-32



H7-33



H8-1



H8-2



H8-3



H8-4



H8-5



H8-6



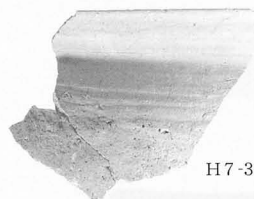
H8-7



H7-31



H7-34



H7-35



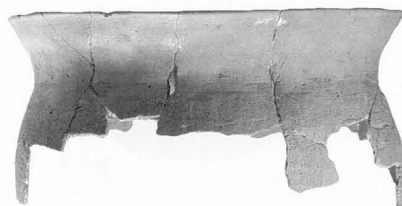
H7-36



H8-12



H8-13



H8-14



H8-9



H8-15



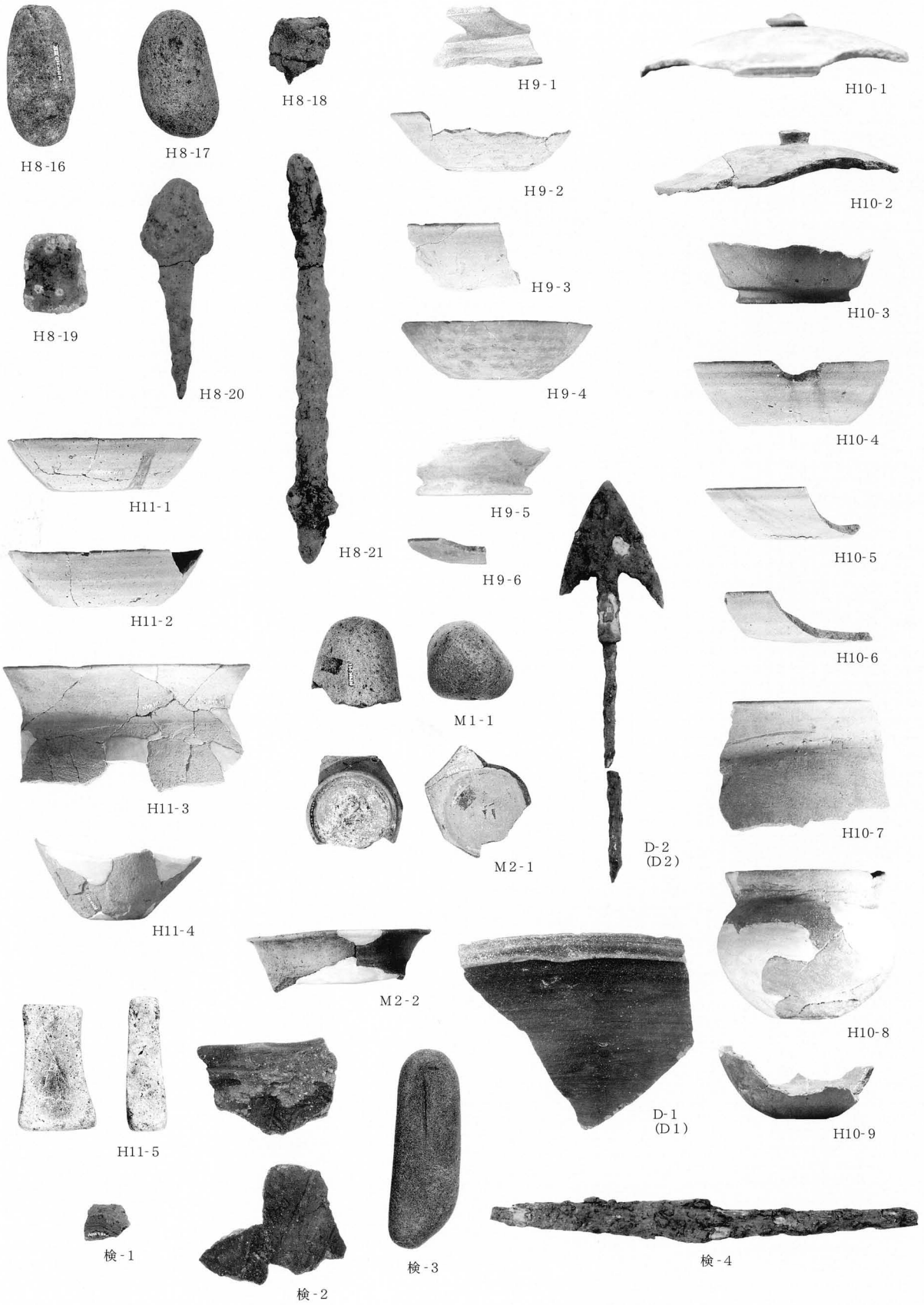
H8-8



H8-10



H8-11



佐久市埋蔵文化財調査報告書 第193集
周防畑遺跡群 南下北原遺跡
—長野県佐久市長土呂南下北原遺跡発掘調査報告書—

2011年3月

編集・発行 佐久市教育委員会
〒385-8501
長野県佐久市中込3056

文化財課
〒385-0006
長野県佐久市志賀5953
TEL 0267-68-7321

印刷所 キクハラインク有限公司

報告書抄録

書名	南下北原遺跡
ふりがな	みなみしもきたはらいせき
シリーズ名	佐久市埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第193集
編著者名	森泉かよ子
編集・発行機関	佐久市教育委員会文化財課
発行年月日	2011. 3. 15
郵便番号	385-0006
住所	長野県佐久市志賀5953
遺跡名	周防畑遺跡群 南下北原遺跡 (略号NMK)
遺跡所在地	長野県佐久市長土呂南下北原996-1 他
遺跡番号	7
経度	138° 27' 54
緯度	36° 17' 14"
調査期間	2009. 08. 06~08. 26 (現場)
調査面積	1, 296 m ²
調査原因	宅地造成事業
種別	集落址
主な時代	奈良・平安
遺跡の概要	集落址-奈良-竪穴住居址3-土師器+須恵器+鉄製品+青銅品 +羽口+編物石 -平安-竪穴住居址-土師器+須恵器+灰釉陶器+鉄製品 +皇朝十二銭「貞観永寶」+布目瓦
特記事項	「刑部仁丸」墨書土器・皇朝十二銭「貞観永寶」・布目瓦

